
秋桜

桜桃

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋桜

【Nコード】

N9801W

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

なあ、覚えてるか？

会いたい、もう一度

大好きすぎて怖い。

コスモス畑で誓い合った。

大きくなってもずっと一緒に居ようと。

しかし、ある日 突然の悲劇が2人を襲った。

責任を感じた蘭は名前と容姿を変えて北海道へ。

有希子の思いやりで新一は大阪へ。

同じ日に転校してきて新一思い続けた楓。
短い秋の、ラブストーリー。

Love . . . 1 〱コスモス畑の誓い〱（前書き）

パラレルストーリーです。

苦手な方はお戻りください。

パラレルですが、新一と蘭は幼馴染で、園子とも、3人でよくつるんです。

その中に、志保ちゃんも入っています。

コナンにも哀ちゃんにもなりません。

それでもいい！

というかたは、どうぞ

Love・・・1 ｝コスモス畑の誓い｝

「なあ、らん。」

「なーに？」

まだ小さな2人は、コスモス畑で誓い合った。

「大きくなっても、ずっといつしよにしような！」

「うん！私もずっと、しんいちといつしよがいい！
ずっと、ずっと！」

まだ、先のことも知らない・・・

あどけない小さな2人。

小さな約束・・・。

「こら！新一！！もうすぐ蘭ちゃんが来ちゃうわよ。」

「わーってるって！」

コスモス畑での出来事を半分、記憶から消えかけているであろう

小学校5年生の夏。

「でも、よかったわあ。

小学生でも2人が仲良くて。

1年生のとき、喧嘩して・・・

あのときはどうなるかと思ったわよ。」

「そんな昔の話、すんなよな・・・」

「どお？帝丹小は楽しい？

一応私の母校なんだけど。」

「まあまあ・・・

って、それ・・・小5の俺に聞くことじゃねえよな。」

「それもそうね。

普通は1年生のときに聞くものよね。」

新一は有希子を呆れたように見た。

「な、なによー。」

「別に。」

ピンポン

「ほ、ほら。蘭ちゃんが来たわよ。」

「へいへい。」

「ら、蘭ちゃん、おはよう」

そそくさに玄関へと逃げていった。

「お、おはようございます。」

「ごめんねえ、すぐ新一くるから。」

「は、はい。」

「ふあああ。」

「新ちゃん、レディの前で欠伸なんてみつともないわよ。」

「はいはい、すみませんね。」

「男の子って日に日に生意気に育っていくって本当なのね。その点、女の子はかわいいんだから！」

いつものことなのか、新一は気にせず靴を履いた。

「んじゃ、行ってきます。」

「いってらっしゃい！気をつけてね。」

「いってきます。」

「いってらっしゃい！」

律儀に蘭はぺこり、と頭をさげた。

「まったく、少しは愛想良くしたら？」

「どうせ俺は無愛想ですから。」

「なによ、その言い方あ。」

あ、そうそう・・・明日ね、園子と遊びに行くんだけど。」

「へえ。」

「本買ってくるの。
話題の恋愛小説、新一も見ろ？」

「みねえよ。」

「だよねえ。新一は、推理一筋だもん。」

何だかんだ言って、楽しそうに歩く2人。

悲劇が起きると、知らないで。

Love・・・1 〽コスモス畑の誓い〽（後書き）

こんにちわ！

そろそろ、こんばんわ。

初パラレルストーリー！

ときどきして、緊張してます。

パラレルってところは、

コナンや哀ちゃんにならず、最初から志保ちゃんが居ること。

そして、新一と蘭が小学校5年生で転校してしまうこと。だけです。

ですので、基本的なことは大体原作どおりです。

あと、オリキャラがでること・・・

まあ、そんな細かいことは気にせずに（自分から切り出したくせに・・・

お楽しみいただけたらなあ、って思ってます。
よろしく願いします。

桜桃

Love・・・2 突然の悲劇

「しーんーいーちー！」

「ちょっと待ってくれって。」

「今日は一緒に買い物行ってくれるって言ったじゃない。
それなのに、まあた推理小説？
いい加減、推理オタクになるわよ・・・って、もうなってるか。」

「あんなあ・・・」

「とりあえず、早くしてよね。」

「私、下で新一のお母さんとお茶飲んでるから。」

「へーい。」

蘭は新一の部屋から出て、階段を下りた。

カチャ

「新ちゃん、まだ読んでるの？」

「あ、はい。」

「まったく、しょうがないわね。
私が一言・・・」

「あ、いいんです！
新一、昨日やっと買えたって大喜びだったんで
私もまだ待てますから。」

「そう？ごめんね、いつつも。」

「いえ。」

「じゃ、それまでティータイムにでもしましょ？」

「はい！」

カ
チ
ャ
ッ

「蘭ー、わりい遅くな・・・」

「えー、新一が？」

「そうよ、蘭ちゃんにもらった
キーホルダー、未だに持ってるんだから。」

「そうなんですか？
でも、私も持ってますよ。新一からもらったティディベア。」

「そうなの？
よかった。あの子も喜ぶわよ。」

「・・・」

「あれ？新一。」

「じゃ、ティータイムは終了ね。
2人とも、気をつけていくのよ。」

「はいっ行ってきます」

「いってきまーす。」

「なんで、そっけない態度なわけ？」

「別に。」

「怒ってる？」

私・・・新一に何かした？」

「そんなんじゃないよ。」

「だったら、どうして怒ってるか教えてよ。」

「怒ってねえって。」

「怒ってるじゃない！」

まだ、キーホルダーを持ってるなんて

蘭にバレて、気恥ずかしかった。

と言えない新一。

ついつい、憎まれ口をたたいた。

「なによ、私たち幼馴染でしょ？

なんでも話してくれたっていいじゃないの！」

「たかが幼馴染だろ？

なんで、そこまで言わなきゃなんねえんだよ。」

「・・・よ。」

さすがに言い過ぎたと新一が焦ったが

すで遅かった。

蘭は目に涙をいっぱい溜めて新一をまっすぐ見ている。

「なによ、なによ、なによ！」

新一なんてもう知らない！バカアアア！」

「ま、待てよ！蘭！！」

新一の言葉なんて気にせず、ただただ走った。

だが、次に聞こえた言葉は

「蘭ツツツツ危ない!!!!!!」

「え？」

新一の大きな声と

鈍い音だった。

Love・・・2 ｝突然の悲劇｝（後書き）

こんばんわ、桜桃です。

新一、どうなってしまうのでしょうか？
それは、次回です。

それにしても・・・やっぱり秋ですね。
寒いです。

お風呂に入って温まなくてわ・・・
それでは、次回もよろしくです。

L o v e . . . 3 　　～自分のせい～

パッ

『手術中』

と赤いランプが点灯される。

手を握り締めて、必死に祈る。

（どうか、無事でいて・・・！）

あのと看、蘭は新一が何故怒っているのかわからなかった。

売り言葉に買い言葉。

蘭も一緒になって反論してしまった。

「新一、ごめ．．．っ」

涙が一粒、頬を伝う。

「蘭ちゃん！！」

「お、おば様．．」

「蘭ちゃん新ちゃんは？」

「し、手術中です。」

「そうか．．．」

「おじ様、おば様．．すみません．．．私を私を．．庇ったんです。新一は．．私がもつと周りを良く見ていれば．．．」

「蘭君、君が気を落とすことはない。君を庇ったのはすべてあいつの自己判断だ。」

「そうよ。」

せつかく蘭ちゃんを守ったのに蘭ちゃんが泣いてたら新一は報われないじゃない？」

「・・・はい。」

手術はよほど困難なのか、まだランプはついたまま。

ドンッ

と私は押されて倒れこんだ。

キキィ

とブレーキの音。

と、同時に鈍い音が聞こえる。

すぐさま後ろを振り返った。

中に舞った新一。

ドサツと落ちる音。

「新一　いいいいいいいい！」

赤いものが流れる。

おそらく、新一の血。

蘭は急いで新一に駆け寄って声をかけたが

新一は意識を取り戻さなかった。

「轢いてしまった車の方が電話してくれたそうね。」

「はい。」

ちよつとよそ見してたとき、私が飛び出してしまって・・・」

「そう・・・」

できるなら、あのときに戻りたい。

そして、楽しい買い物にしたかった。

蘭は心の中で何度そう思ったことだろう。

「蘭ちゃん、新一は助かるから。」

「・・・はいっ」

有希子はそっと、蘭の肩を抱いた。

L o v e . . . 3 〵自分のせい〵（後書き）

こんにちわ！

今日も少し、テンション高めの桜桃です。

いやぁ、おやつの時間ですね。

少し過ぎてしまいましたが・・・。

さてはて、新一くんは助かるのでしょうか？
次回も宜しくです。

Love・・・4 〱束縛〱

「あら、蘭ちゃん・・・今日も来てくれたの？」

「はい。」

「そろそろ6年生になるし・・・
中学校の準備もあるでしょ？大丈夫なの？」

「はい、なんとか。」

「・・・そう。」

有希子の悲しそうな微笑に蘭は違和感を感じた。

「どうかしたんですか？」

「いえ、なんでもないの。」

「・・・有希子！」

「え、英理？来てくれたの？」

突然、英理がやってくる。

「お母さん、どうして？」

「最近あなたが病院に通いすぎだと思って・・・」

「しょうがないでしょ？」

新一・・・私のせいで怪我したようなものだもん。」

「でも、新一君は眠ったままなんでしょう？
あれから・・・」

そう、新一はあれから・・・ずっと、眠ったまま。

~~~~~

「先生！し、新一は・・・新一は助かったんですよね？」

「手は尽くしました。」

しかし・・・目を覚ますかどうか・・・」

「え？」

「結果的には手術は成功したんです。」

しかし・・・当たり所が悪かったせいか、目を覚ますかどうか  
わからないんですよ。」

「そんな・・・息子は、これからどうなるんですか？」

「植物状態・・・の恐れがあります。」

覚悟しておいてください。」

「そんな・・・覚悟だなんて・・・」

~~~~~

「新一は、植物状態・・・かも、しれない・・・でも、私はできるだけ看病したいの!!」

「あなた、まだ小学生なのよ？」

居ても迷惑ってこともあるの・・・」

「わかってる。わかってるけど・・・」

有希子と英理は顔をお互いに見合わせた。

「とりあえず、このお花・・・新一のところに生けてきます。」

蘭は新一の病室へと消えていった。

「英理ちゃん、珈琲でいい？」

「ええ。ありがとう・・・」

ガコンッ

「はい、どうぞ。」

「ありがとう。」

2人はコクツと珈琲を一口、飲んだ。

「フー、それにしても・・・」

「まだまだ小学生かと思ってたらそうじゃないのね。」

「ほんと・・・新ちゃんも蘭ちゃん庇っちゃって・・・もう、一人前になっちゃったのかしら。」

「小学生っていつても、高学年なものね。
大人・・・になっていくのよね、これから・・・」

「ほんと・・・まだまだ、これからなのに・・・」

コトンッ

「英理ちゃん、蘭ちゃんは新ちゃんに縛られてちゃ駄目だともうの。」

「え？」

「蘭ちゃんにはこれから長い人生があるのよ？」

まだ、小学生なのよ？

小学生はまだまだ子供・・・子供にこんなつらい人生を今から決めてちゃかわいそうだわ。」

「でも、新一君は・・・」

「新ちゃんは、私たちが見るわ。」

それにね、新ちゃん今のままだったら死んでしまいかもしれないの。」

「死んで・・・？」

「ええ。だから、アメリカの良い医者さんに見てもらったつもり。」

・・・蘭ちゃんにも会わせないと。」

「・・・お互い、違う人生を歩ませたほうがいいのよね。」

「私は、そう思うの・・・」

駄目かな・・・？やっぱり。」

「いえ。私は賛成よ。」

私も、その方が良いつて、思ってたから。」

「そう・・・よかった。」

『ええ？それで、新一君の看病毎日やってるわけ？』

「うん。それでね、園子・・・」

『わかってる！今度志保も連れてお見舞いいくよ！』

「ありがとう。新一も喜ぶと思う。
じゃ、また明日ね。」

『バイバイ』

ピッ

蘭は満足げに受話器を置いた。

Love・・・4 〽束縛〽（後書き）

こんにちわ

部活がなくて、久々に寝坊いたしました！
桜桃です。

初めての平行・・・

どきどきです。

皆様・・・楽しんでいただけてるでしょうか？（新一が重症なの
に楽しめないって。

毎回更新を緊張しながらかせてもらっています。

感想、いつも有難く読ませていただいています。

感想を送ってくださる、方々・・・

いつも、感謝してます！

ありがとうございます

L o v e . . . 5 つの条件

「蘭。話があるの。」

英理は静かに言う。

「え？なあに？」

「．．．．」

「新一君の看病はもうやめなさい。」

「え？」

「お母さんだつてね、強制させたくないわ。
でも、貴方の将来を考えたら、やめさせるしかないのよ。」

「・・・いや。」

お母さん、新一が私の恩人だつて知ってるでしょ？」

「知ってるけど・・・」

「知ってたらそんなこと言えないよ！
やだ、新一と離れたくない・・・やだよ。」

ここまで執着心が生まれるだろうか？

この2人には何があつたのか？

と疑いたくなる。

「蘭、貴方だけじゃないわ。新一君にだって将来があるのよ。」

「え？」

「新一君だって、将来があるわ。」

それには・・・蘭がいては邪魔になるでしょう？」

「邪魔？」

「そう。新一の邪魔にはなりたくないでしょ？
わかるわよね？」

「・・・ない。わからないよ！
わかりたくない！！」

（バカ、バカ・・・お母さんのバカ・・・！）

ピンポン

「はい。・・・あら、蘭？」

「志保お・・・」

「泣いてるの？・・・とりあえず、中に入って。」

「うん。」

志保は蘭に暖かいココアを差し出した。

「明日、園子と工藤君のお見舞いに行こうと思ってたんだけど・・・」

「そつか・・・ねえ、志保・・・」

「何？」

「自分がしてることが、相手にとってマイナスだったら・・・
志保は、どうする？」

「え？」

「相手にとって、自分は邪魔だったら、どうする？」

「・・・そうね。」

「私なら、その人の傍には近づかないかしら。」

志保は珈琲を一口飲んで、答えた。

「相手が大切であれば、あるほど・・・
近づかないと思う。」

「・・・。」

「私にとって、自分の気持ちは二の次ね。
相手が幸せなら、って・・・思うわ。」

「私には、家族がいないから、余計そう思うのかもね。」

志保の両親は志保が小さいときに交通事故にあった。

孤児院引き取られた志保と姉の明美だったが・・・

昨年、姉の明美も病気で亡くなった。

そこへ、子供がいない阿笠家へと引き取られたのだ。

「志保・・・」

まだ、小学生なのに大人びてる・・・」

「まあ、私が引き取られた孤児院は数人しか預けられてなかったもんだから

周りがほとんど大人だったしね。」

「そっか・・・。」

ありがとね、志保。ココア、ご馳走様。」

「いいえ・・・一人で帰れる？」

「うん。」

蘭は静かにドアを閉めた。

「お母さん。さっきはごめんね。」

「蘭・・・」

「転校、する。」

でも・・・2つだけ、条件をつけたいの。」

「条件？」

「うん。私の存在が新一の将来を邪魔してしまうんだったら・・・遠くへ転校したいの。それが1つ。」

「わかったわ。」

「ちょっと、自意識過剰かもしれなけど・・・

もし、もしね、新一が目覚ましたりしたら・・・

園子も自分の家の権力使ったり・・・とか

して私の居場所を突き止めそうな気がする。

だから、わからないように・・・偽名。そして、容姿を変えて生活したい。」

「え？」

「毛利蘭は、新一との思い出が深すぎるもん。」

だから・・・新一や園子、志保と別れるんだったら・・・

リセットしたい。」

「わかったわ。」

英理は静かになづいた。

Love・・・5 〳2つの条件〵（後書き）

偽名・・・使って学校へ。

コナンや哀ちゃんだって出来たんだし・・・
できますよね？？きつと・・・

Love・・・6 博士頼み？

ピンポン

「はい。」

「あ、博士。」

「おお、蘭くんか。」

にこやかに出迎えたのは阿笠博士だった。

蘭は、あることを頼みに博士の家に来ていた。

「志保、いる？」

「いや、今はおらんよ。」

「よかったあ。博士に内密で頼みたいことがあるからさ。」

「頼みたいこと？」

「うん。」

博士は蘭を中へ招きいれ、飲み物を差し出した。

「え？」

「私、転校するの。」

「し、新一は・・・」

「もちろん、黙っていくつもり。」

園子にも・・・志保にも。だから、今から言うことは・・・誰にも言わないでほしいの。」

博士は静かに息をのんだ。

「ある、メカを作ってほしいの。」

「メカ？」

「うん。博士を天才と見込んで、お願い!!」

「そ、それはいいんじやが・・・メカというのは・・・」

「ボタン一つで容姿を変えられる・・・なんてこと出来ない？」

「・・・容姿を？」

「うん。ほら、スーパー戦隊になりきりセットを作ってくれたとき、あつたじゃない？」

スーパー戦隊なりきりセットとは・・・

ベルトのボタン一つでテレビのように簡単にコシユチュームを脱ぎ着できる・・・

という優れもの。

まだ幼い蘭のために博士がつくったものだ。

「それみたいに作ればいいんじゃないかな。」

「うん。できれば、私だつてわからない顔にしてほしい・・・無理なのはわかってるんだけど・・・」

「いいんじゃないよ。蘭君がわしを頼ってくれただけでうれしいんじゃないから。」

「ありがとう!!」

蘭に笑顔が戻った。

「あら、博士・・・何かつくるの?」

「え? いや・・・まあ。」

「ふうん。まあ、何でもいいけど食事くらいはとってね。」

博士は冷や汗をかきながら

地下室へと足を運ばせた。

L o v e . . . 6 〱 博士頼み? 〱 (後書き)

蘭の容姿を変える . . .

というやり方は博士のメカだったんですね . . .

(少々無理やりか . . .)

Love・・・7　　時は突然に

「あれ？蘭はー？」

「園子と一緒に来たんじゃないの？」

「え？私はてつきり志保と来たんだと思ったんだけど・・・」

お互いに目をパチクリとさせた。

「でも、珍しいね・・・蘭が遅刻なんて。」

「ほんと・・・園子ならまだしも。」

「ちょっと、それどういう意味？」

「そのまんまの意味よ。」

「・・・志保って精神年齢高すぎよね。」

「周りが大人ばかりだったせいかしら。」

園子は呆れるように志保を見上げた。

ガラッ

「こらっいつまで立ってるんだ、早く座れ!!」

「す、すみません・・・」

「ごめんなさい。」

次々と座っていく。

「あ、先生！蘭なんですけど・・・」

「ああ。話しは聞いている。」

「話し？」

「・・・何のことかしら。」

「わかんない・・・。」

再び目を丸くさせた。

「転校だろ？」

「
「
・
・
・
・
・
・
・
え
?」
」

「なに、転校って・・・志保、聞いてた？」

「全然・・・その様子だと園子も聞いてないみたいね。」

「うん・・・あの、先生それってなんかの間違いじゃ・・・？」

「昨日親子そろってきたぞ。転校しますって・・・
そういや、昨日の晩にはもう引越したんじゃないかったか？」

担任は「何だ、聞いてなかったのか？」と不思議がった。

「何で蘭、私たちに何も言ってくれなかったのかな。」

「さあ・・・蘭のことだから別れがさびしくなって・・・
とかじゃないの？」

「だよー・・・。」

ピンポーン

ピンポーン

「やっぱ、引越しちゃったんだ。」

「のうね・・・。」

でも、売り家とかかれて居ないところを見ると・・・。」

「売られてないんだ。」

小さくため息。

「あら、園子ちゃんに志保ちゃんじゃない。」

「あ！おば様！！」

「どうかしたの？家に何か？」

声の主は英理だった。

「あの、蘭が転校したって・・・」

「あー・・・実はそうなのよね・・・
ごめんなさい。貴方たちにはどうしてもつらすぎるからって何も
いえなかったのよ。」

「そうなんですか・・・」

「でも、何でおば様はここに？」

「私は法律事務所があるし・・・ここに残ることにしたのよ。」

「あ、じゃっ蘭の住所知ってますよね？」

「お願いします！教えてください。私、絶対会いに行くんで。」

園子の言葉に英理は静かに首を横に振った。

「ごめんなさいね、蘭の希望で自分の場所は教えないでと言われたの。」

「え？」

「本当に、ごめんなさい。」

2人の頭の中に、英理の言葉が深く刻み込まれた。

L o v e . . . 7 〵時は突然に〵（後書き）

予約更新しました

風邪気味の桜桃です・・・。

えっと、予約更新したのが土曜日なので・・・

じゃんじゃん投稿できたら・・・したいですね。はい。

次回もよろしく願います！！

Love・・・8　　↓今現在は↓

「ほなみ〜!」

「あ、みなみ!!」

彼女は木之元みなみ。

ほなみと同じクラスで同じ部活。

合唱部に所属している。

「合唱部だね・・・」

「・・・へえ。わかったよ。」

ほなみと言うのは、皆様ご存知・・・蘭の偽名。

村崎ほなみ。

小学校6年生のときに転校してきた蘭・・・ほなみの一番最初の友達
達はみなみだった。

『ほなみとみなみって・・・似てるよね。』

これが出会い。

そして次は・・・

岩居玲奈。

『みなみのことはサダコって呼んでいいから!』

『まあた玲奈ったら変なこと吹き込んで!』

そして、笹原美梨。

『ま、よろしくね。』

雰囲気はどっちかっていうと、志保ちゃん……

まあ、性格は志保ちゃんじゃないけどね。

中学校に入ってからのお友達。

1年生のとき友達になった

閉真帆。

常に元気!!

まあ、族でいうと、園子……タイプかな。

あと、東宗吾と寺井司。・・・同じ合唱部で・・・

2年生のときに合唱部に入ってきた笹原美音。

北海道に来ての大切な友達。

「ほなみ、ほなみ？」

「あ、何？」

「いやね、キヨコがさあ。」

「未来？」

「そ。32歳の小学校教師と付き合ってたんだよ。」

「ええ！？」

キヨコとは、清湖未来のこと。

結構危ない人と付き合ってることが多い。ほなみの友達の1人。
今は同じクラスのみなみと玲奈と話している。

「しかも昨日、10時に家に帰ったみたい。
本気でやばいよね。」

「でも、先生にバレるのも時間の問題だね。
いろんな人に付き合ってること、バラしてるもん。」

「っていうか、先生にも付き合ってること、言っ
たみたいよ。」

「そうなの!？」

「うん。自慢してた・・・。」

「バカか、あいつ・・・。」

玲奈は頭を抱えている。

「あ、だから昨日・・・。」

「昨日?」「」

ほなみがつい、漏らした声に2人は敏感に反応した。

「うん・・・生徒指導質で未来ちゃん、先生と話してたのみの。」

「それって・・・あれだね。」

「・・・はあ。」

みなみがため息を漏らしたとき、泣きながら教室に入ってきた未来。

「もぉ」

「どうしたのっ」

「キヨコ」泣くな」

みなみと玲奈は当然のごとく、呆れながら未来を見ていた。

「親に付き合ってることバレた。」

「・・・そりゃね。」

「そりゃねって、何!？」

「だってアンタ・・・他の人に付き合ってるんだって言うてたし。」

「そもそも、先生に言ってる時点で親に伝わるくらい想定しときなさいよね。」

(たしかに・・・)とほなみは内心思う。

「でもさ、親が口出することじゃないでしょ?」

「あのねえ・・・中学生だよ?

義務教育!!親が口出するに決まってるでしょ?

まだ親が子供の責任を取る時期なんだから。」

みなみの言葉に未来は数秒言葉を無くした。

「しかも相手が小学校の先生で・・・20歳くらい上だったら誰だって心配するだろ?」

「玲奈。」

「キヨコ！今回はお前が悪い！！」

「っていうか、そもそも気持ち悪いよ？そういうの・・・」

大体、20も年下の・・・中学生相手に本気の恋愛すると思うっ？」

「そうかもしれないけど」

泣き続ける未来にはなみは同情してしまう。

「ま、今回・・・一番立場悪いのはあっちだろうね。」

「そりゃそうでしょ。」

「っていうか、さっき呼び出されてた。」

「・・・ハア！？」

「なんか、未来が部屋出たとき、学校来てたもん。
うちの親と一緒に。」

「それ、ヤバイね。」

「まあ、未来になにかあったらあっちの責任と・・・」

学校の責任と・・・っているろあるしね。」

「未来、何にも悪いことしてないのにいゝ」

「「いや、してるから。」」

みなみと玲奈の冷静なツツコミ。

「気を落とさないでよ、未来ちゃん。」

「ううゝ。」

授業が始まるまで・・・というか、始まっても未来は泣き続けていた。

L o v e . . . 8 〽今現在は〽（後書き）

おはようございます。

予防接種を受けて、腕が痛い桜桃です。

中学校編もよろしくおねがいします！

Love・・・9 〽部活って、怖い?〽 (前書き)

北海道の学校は、神山中学校。

制服はセーラー。リボンは、リボン結びにしてある。

髪の毛はポニーテール。

容姿は・・・ブスでもない、普通。(博士が少し、手元を誤ったため。)

木之本みなみ・・・下のほうで2つ縛りにしている。精神年齢が高いといわれる。

岩居 玲奈・・・短いボブカット。男の子っぽい口調。「おいおい」とか。

清湖 未来・・・ショートカット。泣き虫で惚れやすいタイプ。

笹原 美梨・・・軽くウェーブのかかったショートカット。とにかく怖い。

閉 真帆・・・玲奈と同じような髪型。お調子者。

笹原 美音・・・ふわつとしたショートボブカット。おとなしい。

Love・・・9 〰部活って、怖い？〰

3年生が引退するまであ問わずか。

全日本音楽コンクールに向けて日々練習をしていた。

「そついや、海月^{みづき}が今日、空手の試合だつてさ。」

「へえ。そついや海月って有段者だつて。」

「そつそつ。そんでもってバレー部で・・・可愛くてさ。ま、男好きってところが玉に瑕？」

「いえてる。」

(空手・・・)

ほなみは心の中でつぶやいた。

「やりたいな。空手・・・」

「え？」

「あ、なんでもない。」

東京でもやっていたほなみ。

つい、懐かしく感じる。

（毛利蘭としてだったら・・・空手、できるかな。）

少し、考えるほなみだった。

「んじゃ、練習はじめます。」

部長の声かけで練習がスタートした。

パート練習

「そういえば、ここに空手部なんてないよね。」

「昔はあったみたいだけど、今はね。」

「だよねー。あったら入りたかったんだ。」

「へえ。」

「あ、やばっ先生くる!」

急いで練習。

ほなみのパートはソプラノ。

一番仲の良い、みなみはメゾ。

真帆はアルトで離れ離れだった。

あと、嫌われている明日香も。

美黎の視線が怖くてたまらない。

(にらまれてるのかな。)

プチッ

「何か考え事？」

「え？」

「余計なこと、考えてるでしょ。
やりたくないんだったら、かえっていいけど。」

「あ、ごめん。」

「いや、謝るんじゃないの。帰っていいよって提案してるだけ。」

「だ、大丈夫。」

「そう？ならいいけど・・・」

（ひええええ、怖い！！）

場の雰囲気が悪くなると感じた先輩方は必死に明るくしていた。

「・・・あれ、真帆ちゃんは？」

いつも途中まで、みなみ・真帆・美音と4人で帰っていた。

「美梨と一緒に。」

「最近、仲いいね・・・」

「うん。」

3人でとぼとぼと歩いた。

「怖いな・・・部活。」

「うん。美梨ちゃんが特に。」

「やっぱ、美音ちゃんもそう思う？」

ほなみは・・・まだ安全地帯だよね。それでも・・・」

「そうかな？」

「そうだよ。生徒会入ってるでしょ？だから・・・さ。」

「でも、真帆ちゃんも入ってるでしょ？」

「真帆は次、入らないからさ。」

「そっか・・・」

少々の沈黙が流れた。

L o v e . . . 9 部活って、怖い？（後書き）

こんにちわ。

部活が休みでのんびりしてる、桜桃です。

とにかく、美黎さまは怖いんです。

東くん、一歩間違えればあの子はノイローゼですね。はい。

ま、そのわけはいずれ、更新させていただきます。

次回もよろしくです！

Love・・・10　く涙の合唱コンクール

ほなみやみなみ、玲奈、未来のクラスの担任は熱かった。

とにかく、熱かった。

熱血担任！って本当にいるんだな、って思うほど。

細身の体でスマート。

背はわりと小さい分類で・・・

あの人は芯から熱いんだな。って思う。

でも、クラスの皆はそれを『うざい』とは取らず、『面白い』と捉えていた。

「いやゝ2組、暑いねえ。」

いつの日だったか、保健体育の先生が教室に入るなり、こう呟いた。

「担任が熱いですから。」

「その熱さが教師にまで染み出ちゃったんです。」

まあ、現に他のクラスより2組の教室が一番暑い。

それも・・・この2組と担任の良いコミュニケーションなんだと思う。

「2組でよかったあ。」

休み時間、みなみは呟く。

「去年は、2組が嫌だったけれど・・・」

「そう？未来はよかったけど。」

「そりゃあんたは、授業受けないで小説読んでたからね。
楽しかったでしょうよ、授業受けたい人にはたまったもんじゃな

かった。」

「だよね・・・」

ほなみとみなみと未来は去年、2組。玲奈だけが1組だった。

「玲奈はいちくみいゝ うらやましいか、うらやましいだろ！」

「すごいム力つく。」

「まあ、まあ。」

「あ、そろそろ時間じゃない？」

「え？やばっ私早く行かなきゃ。」

生徒会で仕事のあるみなみは大急ぎで教室から出て行った。

今日は学校祭。

開会式で、合唱コンクールの発表がある。

皆、ドキドキで体育館へと向かっていった。

「ドキドキ・・・やばいくらいドキドキ・・・」

「だよな。」

「あー、未来っ金賞じゃなかったらマジ泣くぅ」

「泣け泣け、そんでもって枯れてしまえ。」

「うわっひどっ」

軽くあしらう玲奈を未来はたたいた。

「いたーいー!!」

わざと、大袈裟に大声をあげる。

「キッヨコはなっきむーしなっきむーし」

「何歌ってんの、お前はー」

2人のおかしな会話にほなみは思わず、笑みを浮かべた。

『さて、合唱コンクールの発表です。』

ざわざわ・・・

「大丈夫かな。」

「ドキドキだねえ。」

『発表順にいききたいと思います。』

金賞と銀賞が聞き取りにくいので、金賞の場合はゴールド金賞。
銀賞の場合はシルバー銀賞と言わせていただきます。』

淡々と説明が始まる。

『それでは、2年1組から発表させていただきます。
2年1組・・・ゴールド金賞です。』

わあああああ

「終わった。」

「最悪・・・」

「やっぱり駄目だったかあ。」

口々に言い合った。

『続いて、2年3組。．．．シルバー銀賞です。』

パチパチッ

3組はあまり、反応しなかった。

『続いて、2年2組。．．．』

皆、諦めきっていた。

1組に勝てるはず、ないと・・・

『ゴールド金賞です！』

「え？」

わあああああつ

驚いている人と、喜んでいる人と・・・

そんな2組の皆に、音楽の渡部先生は小さく微笑んだ。

Love・・・10 涙の合唱コンクール（後書き）

私はね、この時生徒会があつたので

ステージ裏にいたんですけど・・・

すごい喜びました。

会長・・・先輩と思わず抱き合ってしまったよっ

ちなみに、先輩のクラスは最優秀をとるほどうまいクラスでした

L o v e . . . i i
くキツイお言葉く(前書き)

みなみ視点です。

Love・・・11　くキツイお言葉く

「お疲れく。」

外周が終わって、学校の中へ戻ろうとしたときだった。

私と真帆と美黎の3人でかばんを持って、歩こうとする。

「あ、そういえば・・・」

ふいに美黎が私に声をかけた。

「もう一回、生徒会やるんでしょう？」

「え？」

触れてほしくないところ。

なんとなく、予感はしていた。

「誰が？」

わざと、とぼけてみる。

「あんた。」

「あ、うん・・・やる。」

ぎこちなく、顔を縦に動かした。

「何考えてんの？」

「え？」

「あのさ、一回目やってて、どれだけみんなに迷惑かけたか、わかってんの？」

「うん。だから、今度はやる日にちを決めようって・・・
毎日はやらない方向だから・・・。」

「いや、そういう問題じゃないから。」

今回も、厳しくツッコまれる。

私としては早く逃げ出したい。

「どのみち一日は遅れをとるってことでしょ？」

「うん。」

「それが、迷惑なの。」

あんたさ、何のために部活入ったわけ？」

「・・・」

「もういいよ、勝手にすれば？」

美黎は1人で進んでいつてしまった。

真帆もてくてくついていく。

私もその後ろを、ビクビクしながらついていった。

L o v e . . . 1 1 〱 キツイお言葉〱 (後書き)

あの時は、マジで怖かったです。

Love・・・12　く裏ボス？」

「いやあ、昨日は怖かった。」

みなみは、生徒会室でばやいた。

「え？何かあったの？」

書記の先輩が声をかけた。

「あのさ、笹原美梨ってしってる？」

「ああ、ピアノが上手な子でしょ？」

「うん。その子に昨日・・・ちょっとね。」

「え？どうしたの？」

今度は会長・・・兼合唱部の先輩が声をかけてきた。

みなみは、昨日のことを包み隠さず、すべて言う。

「美黎ちゃんねえ。確かに言いそう。」

「ってというか、美黎ちゃんは何様？って感じにならない？」

「怖かった……。」

「みなみはまだ良いじゃん。」

宗吾がつぶやいた。

「ああ！宗吾のアレは酷かったね。」

真帆が小さくうなづいた。

「東くん、なんかあったの？」

「あつたのじゃないよ。」

あれは・・・もうなきそつになった。」

宗吾にあの日のことを語ってもらった。

~~~~~

「3日前くらいのことなだけどさ。」

普通に部活が終わって、帰ろうとしたときだったんだよ。」

「場所は駐輪場だね。」

「そう。で、司と2人で自転車にまたぐときに、  
美黎が話しかけてきて・・・  
生徒会をもう一回やるって言ったわけよ。」

「うん。」

「そうしたら・・・」

あのさ、みんなに迷惑かけてきたんだよ？  
わかんないの？ってか、アンタこの中学校生活なにしてきたわけ？  
って言われてさ・・・そーいや僕、何してきたんだろうなって星  
空見ながら思ったわけよ。」

「うん、それで？」

「で、黙ってたなら美黎が、言っとくけどアンタがやってきたこと今まで全部無能だから。

って言われて・・・そう考えたら悲しみ通り越して笑っちゃったんだよね。」

「そう。そしたら司がぶっ殺してやろうか！  
って宗吾の胸倉掴んで怒鳴ったんだよね。」

「そう、で後ろから美黎が殺していいよ。って言って・・・」

「・・・それ。さすがに酷くない？」

「度が過ぎてるよね。」

「ごめん、東君・・・あの時みなみが居たら一緒に言われたと思うんだけど・・・」

みなみ居なかったから、東君に全部いったよね。ごめん。」

みなみが手を合わせて謝った。

「まあ、それで・・・一時間くらい説教があって・・・」

「でもさ司・・・美黎にめったくそに言われる宗吾が可愛そうになったのか

最後のほうには、これは最後宗吾が決めることだから俺たちが言うことじゃない。

って言ったでしょ？」

「おお、かつこいい！」

「まあ、帰り際に美黎が言っとくけど責めてないから。って言うんだ。

で、美黎が帰ったとき司と・・・あれ、絶対美黎、責めてるよな・・・

・  
って話しながら帰った。」

「ごめんね、宗吾・・・真帆、何もいえなくて・・・」

「いや、あの状況で言えるほうがすごいよ・・・」

口々に怖いね、とつぶやいた。

「部活、いけない・・・怖すぎる。」

「だよね・・・」

「ま、がんばれ。」

「先輩、人事すぎます・・・」

「だって人事だもん。」

「わあ、ひどい〜。」

などと口々にもらしていると、少し心の荷が下りた気分になる。

「でも、やっぱり美黎ってボスだよな。」

「うん。裏ボス？」

「っていうか、闇の帝王・・・って感じだよな。」

「絶対美黎に口げんかで勝てないわ・・・」

「勝てるやつが居たら見てみたい。」

「確かに・・・」

L o v e . . . 1 2 ｝裏ボス?｝（後書き）

明日から平日・・・んで、部活。  
が、がんばろー・・・。



『優等生』

みなみを漢字で表すと『優等生』

と皆に言われる。

校則は破るものだ！という人に対し、

みなみの場合、校則は守るためにあるもの。

と常日頃思っていた。

そんなみなみと一緒に居るせいかな、

ほなみを同じ感覚で居た。

まあ、当たり前といえば、当たり前。

「好きな人が居たら、毎日が楽しいんだろっな・・・」

「玲奈も思うっ。」

「ほしいよねえ。・・・ほなみは？」

「え？私？んっ・・・」

「ほなみも腐女子？」

「かもねえ。だってさ、好きになった男の子居ないんでしょ？」

「あれ、でもさほなみって彼氏いるんでしょ？」

みなみの言葉にほなみは目を真ん丸くさせた。

ほなみだけじゃない。

一緒に話していた玲奈と未来もだ。

「えっ!？」

「だって、ほなみの学生証入れにさ男の子の写真あったから・・・  
てつきりそう思ったんだけど。」

「な、何で知ってるの!？」

「んつとね、ほなみに修正テープ貸してって言って、  
鞆の中にあるって言ったとき。」

「あゝ・・・」

「で？彼氏なの？」

「っていつか、その男みして!」

ほなみは顔を赤くさせて、学生証入れを出した。

「これ、いつの時の？」

「小学校5年生のとき。」

「ちょうどそんな時ほなみが転校してきたんだよね。」

「そう・・・」

「そのときの彼氏？」

「え！？ち、違う・・・幼馴染。」

「幼馴染？」

「そう。でもね、もう絶対会わないって決めたんだ。」

「え？何で？」

「秘密。」

「教えてよー！！」

体をゆすれられて、「教えられない。」といいながらほなみは笑った。

でも、その笑顔は無理をしていることを．．．みなみと玲奈はわかっていた。

「ねえ、ほなみ．．．」

掃除が終わったところ、みなみと玲奈が話しかけてくる。

「話があるんだけど、いい？」

「え、いいけど・・・」

人目のつかない、トイレの中へと向かった。

Love・・・13 写真の男の子（後書き）

こんばんわ！

完全防備の桜桃です。

寒いですね

北海道は、初雪が降ったそうですよ。

もう・・・

でも、まだまだ秋なんです。

雪が降っても・・・

この小説は続けていきますよー！！

秋の恋、ですからね

「でー、話しとは．．．」

「今日の写真の男の子についてなんだけど。」

「ああ．．．それなら、言ったとおり。  
ただの幼馴染。」

「そうじゃなくて。」

「え？」

「無理して笑ってる。」

「．．．」

ほなみは何も言えず、黙り込んだ。

「ごめん。あんまり深くは聞かないけど．．．  
どうしたのかな、って。」

「言いたくないなら言わなくていいからっ」



「・・・バレちゃうか。やっぱり2人には。」

「やっぱり、何かあるんだ。」

「うん・・・これから言う話し、誰にも言わないでくれる?」

「うん。」

「わかった。」

みなみと玲奈は深くうなづいた。

「小5のとき・・・まだ私が東京に居るときね。」

その男の子、新一って言うんだけど・・・ある日2人で出かけようとしてたの。」

いつもみたいに・・・だけど、途中で喧嘩しちゃったんだよね。」

「喧嘩？」

「そう。なんか新一が怒ってるから、

私と来なくなかったのかな、って思ったら泣けてきちゃって・・・それ隠すためにわざとこっちも強がった口調になってさ・・・。」

「うん・・・。」

「で、喧嘩になって私が足取りを早くして歩いたら・・・車が来たの。」

「え？」

「轢かれそうになった私を・・・新一が庇って・・・。」

「なんか、すごいね。」

自分だったら、できないよ。そんなの。」

「危ない！パンツみたいな感じになっちゃうよね。」

頭ではわかってるけど、体まで行き届かない・・・みたいな。」

「・・・私もすごいと思う。」

ほなみは小さくつぶやいた。

「で、その新一君って子は？」

「意識不明の重態。

30%の確率で植物状態だったの。

それでも低いから、もしかしたら目を覚ますかもって思ってた……  
毎日看病を続けた。」

「うん、だろうね。」

「でもある日……言われちゃったんだよね。」

「何を？」

「もう、行くなって。」

「え？」

「看病には行くな、貴方の人生がある……ってお母さんに言われて。」

「お母さんに？あれ、お父さんとの2人暮らしじゃ……」

「お母さんは東京に居るの。事務所があるから。」

「事務所？」

「あれ、言ってなかったっけ？お母さん、弁護士だって。」

「い、言ってない！言ってないよ！！」

「そうだっけ、ごめんね。」

「初めて！うわ、びっくりした。」

「あはは・・・」

話しの方向性が変わると、玲奈が呆れ半分に話しかけた。

「話しの途中ですけど。」

「あ、ごめんごめん。」

それでね、私は転校してきたっただけ。」

「・・・でもさ、それって逃げることになるんじゃないの？」

「わかってるんだ・・・」

でもさ、あんな風に必死に娘の心配をするお母さんを見ちゃうと・・・

自分のことも大切にすることが、親孝行なのかなって思っ

「・・・わかる気がする。誰でもない・・・母親の頼みだもんね。父親ならまだしも。」

「そうなの！」

「はははっ」

「そっか。ま、とりあえず悩みの原点が聞けてよかった！  
これからは何かあったら相談してね？」

「サダコに相談してもな・・・」

「れっな？」

「・・・クスクス、ありがとう。2人とも！」

心の底からの笑顔を見せたほなみに、2人は心底ほっとした。

Love . . . 14 〱自分の過ち〱 (後書き)

はい。眠たい桜桃です。

寒いですね。

はい．．．南側の地方の皆様は

まだまだ暖かいでしょうか？

北は寒いです。寒すぎます．．．

明日もガンバローッ！

L o v e . . . 1 5 ｝新たな出会い｝（前書き）

そのころ、新一は・・・

Love . . . 15 　　〈新たなる出会い〉

場所は千川<sup>せんがわ</sup>中学校。

ここは大阪。

「おお、君が工藤君やな。  
担任の松橋や。よろしゅうな。」

「よろしくお願いします。」

「あれ？もう１人おらへんな。」

「もう１人？」

「あ、来よった。」

「す、すみません！遅れました。」

「いや、ええで。じゃ、教室あんないするからついてきてや。」

「はい。」



てくてくと、松橋の後ろを新一と女の子はついていった。

「あなた、名前は？」

「・・・工藤新一。」

「へえ。新一くんかあ。」

私は、白石楓。東京の米花中学校から来たの。」

「米花！？」

「うん。」

「俺も米花だったんだ。帝丹中学校。」

「へえ。結構近かったんだね。  
でも、初めてなんだ。ブレザー。  
前の学校はセーラーだから。」

「そっいや、米花中ってセーラーだったっけ。」

「帝丹中也学ランでしょ？」

「ブレザーっていいよね、大人っぽくてさ。」

「わかる。」

初っ端から意気投合の2人に松橋は笑みを浮かべつつ・・・  
静かにするよう、注意した。

ガラッ

「転校生が来よったぞ」

「ええ！？ほんま！？」

「男？女？」

「どっちもや。」

「わあ！お得！！」

「お得って・・・」

「入ってきてええーぞ」

2人は入る。

「うわ！カッコええー・・・」

「かわええーなあ・・・」

新一は中学生とも思えないキリツとした口調で挨拶をした。

「東京から来ました。工藤新一です。  
特技はリフティング、趣味は読書・・・特に推理小説が好きです。  
これから宜しくお願いします。」

楓は、さらさらな栗色の長い髪を揺らした。

「白石楓しらしいしかえてです。」

同じく東京から来ました。

特技は掃除。趣味はショッピング。

これから宜しく願います！」

いきなりの美男美女にクラスは圧倒された。

「し、質問ええーやろか？」

「どうぞ。」

「ふ、2人って恋人同士なん？」

ほら、同じ東京から来たみたいやし・・・」

新一と楓は目を丸くして小さく笑った。

「残念。同じ東京でも学校は違うの。」

ま、そうだったらどんなに素敵、かしらね？」

「そんなドラマみてーなこと、ないと思うけどな。」

「へえ、でも息がちよつきしやなあ。」

と口を漏らしながら2人を眺めていた。

Love・・・15 〽新たなる出会い〽（後書き）

こんばんわ〽桜桃です。

適当な時間に予約更新してます。

感想の返信が遅れてしまうこと、大変申し訳ありません！！

さてさて・・・

やっと新一のほうにもたどり着けました！

新一と蘭、行き来しますが、混乱せずについてきてくださいー！！（笑

次回も宜しくお願いします

Love・・・16 〽早公認?〽 (前書き)

白石 楓・・・腰まである長い髪(茶髪)サラサロングヘア。  
目がぱっちりしてて、二重。

スタイルも良い。頭も学年では15位以内に入るほど。  
スポーツも万能。一見チャラく見られがちだが  
意外としっかりしていて、真面目。  
世話焼きタイプ。



「へえ、楓ちゃんって前の中学校ではバスケット部やったんやね。」

「うん。あれ、新一君は何かに入ってたの？」

特技がリフティングって言ってたし、サッカー部？」

「いや、俺正確には部活どころか学校に行ってねえんだよ。」

「え！？不登校生やったの？」

「そうじゃねえーよ。小さいころ事故にあって、ずっとリハビリしてたんだ。」

で、いつものように病院で寝てて、気がついたらフェリーに乗ってたんだよ。」

「フェリー？」

「んで、転校することになった。」

「な、なんか・・・複雑やね。」

「まあな。」

新一の言葉に楓は気まずそうに頭を下げた。

「ごめん。立ち入ったこと聞いて・・・」

「気にすんなよ。」

「そっか。」

そんなとき、甲高い声が聞こえた。

「俺、服部平次や！」

さっき推理小説が好きや言うつつたけど、何が好きなん？」

「お前も推理小説が好きなのか？」

「まあ・・・」

「俺はやっぱり、ホームズかな。」

「ホームズかあ。」

ちゆうことは、コナン・ドイルやな。」

「ああ。」

「コナン・ドイルもええけど、エラリー・クイーンのほうが・・・」

ドンッ

ふいに平次のおなかを肘が直撃した。

「・・・っ何すんねん！このドアホー！！」

「工藤君、コナン・ドイルが好きやて言ってたやん！  
なのに何でわざわざコナン・ドイル汚すようなこと言つの？」

「汚す？誰が。」

「あんたが。」

「俺はそんなつもり・・・」

「平次がそんなつもりなくても、周りからはそう見える！  
ほら、工藤君に謝りっ」

「何で俺が・・・」

「もう一撃、くらいたいん？」

「すみません。」

平次が新一に頭を下げた。

「ごめんなあ、工藤君。このアホが!!」

「いや・・・」

「あたし、遠山和葉! このアホの幼馴染兼お姉さんみたいなものから。」

いろいろ話しかけてきて?」

「ありがとう。」

そう新一が言うと、我慢の限界な平次がムスツとした顔で怒鳴り込んできた。

「アホアホうるさいんじゃアホー!!」

「アホのアホって言って、何が悪いー!?!」

「あーあ、また始まりよつた、漫才。」

「日常茶飯事やもんね。」

「工藤君、楓ちゃん、気にせんといて？」

「う、うん・・・」

「ああ・・・」

「あーあ、工藤君を見習ってほしいわ。

おとなやもん。それに比べて平時は子供やね。」

「んやとぅー!!」

「悔しかったら大人になってみい！平次。」

「・・・止めなくていいの？」

「止めるだけ無駄なんよ。」

「あ・・・そう。」

2人の喧嘩は収まらない。

そんな2人を面白そうに、そして悲しそうに新一は見ていた。

「・・・新一くん？」

「あっ・・・何でもねえよ・・・」

「悲しそうな目、してたから・・・」

「そうかあ？」

「私に、何でも言っただね。相談のるから。」

「・・・ありがとな、白石。」

「うん。」

「あの2人・・・」

もう1組の漫才夫婦になるかもしれへんね。」

「アホ。あの2人は漫才なんかやらへんわ。」

「確かに。」

「早、公認・・・やね。」

「うん。」

2人の後姿を見て、微笑んだ。





L o v e . . . 1 6 　　～ 早公認?～ (後書き)

楓ちゃん、すっごくいい子なんですよー!!

なので、なので、嫌いにならないでくださいね??

(　くどい・・・)

次回も宜しくお願いします!

Love・・・17 一番近い位置

「楓ちゃん、どないなシャンプー、使ってるん？」

「ほんま、髪がサラサラやな。」

「うらやましい・・・」

「別に、普通だよ？」

ただ、トリートメントして・・・乾かしてるだけ。」

「ええ？全然そう見えへんよ！」

「ほんと？」

「なんか、うれしいな・・・ははっ。」

「へーいーじー！！」

そのタオル、あたしのなんよ！！」

「ええやんけ、一枚くらい！！」

「それ、お気に入りのやつなんや！  
それに今日、一枚しか持ってきてきてないの！」

「ほゝそれは、残念やな。」

ボキッ

「平次がそんなに命がほしくないなんて知らんかったわあ。  
そんな命知らずなんてことも・・・知らんかったわあ・・・。」

「か、和葉・・・早まつたら・・・」

「何？」

「な、なんでもないです・・・」

その瞬間、平次の叫び声……いや、悲鳴が学校中に響き渡った。

「ふんっ！」

「あ、相変わらず凄いね、服部君と和葉ちゃん……」

「ほんまの漫才夫婦みたいやろ？」

「本当に付き合っていないの？あの2人。」

「そうや。」

「へへ。信じられない。」

「まあ、平次君と和葉が付き合っていないことも信じられへんけど……」

「工藤君と楓ちゃんが付き合っていないことも不思議やねん。  
あたしらは……」

「ええ？」

「だって、ラブラブやん。」

「はぁ！？全然！！」

楓は力いっぱい拒否をした。

「だって、2人で図書室で勉強しとったやん！」

「あれは・・・私、社会苦手だから教えてもらってたの。それだけよ？」

「苦手って・・・いつも80点代やん。」

「ま、ただの勉強会だから。」

「んー、でも結構うわさなんよ？」

「2人が付き合うのは時間の問題や、って。」

「ええ！？」

「絶対ない、そんなこと絶対ない。」

「そんな力いっぱい拒否せんでも・・・」

「私と新一くんはそんなじゃないから！！」

「でも・・・」

「工藤君のこと、新一くんって呼んでるの楓ちゃんだけなんよ？」

「だったら、皆も呼べばいいじゃない。」

「呼べへんよ・・・」

「やっぱり、名前で呼ぶのって特別みたいやもん。」

「うんうん。」

「そんなもん？」

楓は頭に？マークを浮かべた。

「とにかく、今女子で一番工藤君に近いのは  
楓ちゃんなんよ!!」

「へ、へえ・・・」

友達の気力に楓は苦笑いで返した。





L o v e . . . 1 7 〱 一番近い位置〱 (後書き)

まだまだ新一が続きますよー!!

楓ちゃん、心の変化もある・・・?のか。

「楓ちゃん、一緒にお弁当食べへん？」

「和葉ちゃん！うん、いいよ。」

「あの色黒のアホと一緒になんやけど・・・ええ？」

「全然っ！」

「よかつた〜楓ちゃん、優しいんやね。」

「え？全然。」

「あはは、おもしろいし。」

和葉の言葉に楓は顔を赤くした。

「あんまりからかわないでよ・・・」

「ははっじゃ、行こか？」

「うん。」



「あれ？工藤君も一緒なん？」

「ああ。俺が弁当食いに行こう思うたら、こいつがついて来たんや。」

「工藤君、人気なんよ。」

誰がわざわざあんたんところについて行くの？  
平次が無理やり連れてきたんやろ？」

「え？」

「バレバレやもん。」

「ごめんな、工藤君。こないなアホに引ッ掻き回されて。」

「いや、いいぜ。別に。」

それにしても、大変だな。和葉ちゃんも。  
こんなハイテンションなやつといっつも一緒じゃ。」

「「いっつも一緒やない！！」」

息ピッタリな2人を見て新一と楓は笑う。

「幼馴染・・・ってのもいいよな。」

「え？」

「あ、何でもねーよ。」

「？」

「んじゃ、食べよ、食べよー!」

可愛いお弁当箱を開けた。

「あ、ティッシュ忘れちゃった。」

「あ、あたしも・・・平次、持ってる？」

「持ってるわけないやろ。」

「俺、持ってるけど・・・」

「え？」

「男の子なのに、珍しいんやね。」

「さっき、ハンカチ持ってるのもみたで。」

「すごい・・・」

和葉の言葉に新一はかすかに笑った。

「まあ・・・あいつに何度もハンカチとティッシュ持ったか確認されたから・・・」

「つい、癖になっちまったんだよな・・・」

「何か言った？」

「いや、何にも・・・」

「はい、これでいいんだろ？」

「うん、ありがとう!!」

「あれ？工藤君・・・なんか落ちたで。」

和葉がひょいっと拾った。

「あ・・・」

「可愛い女の子やね。隣におるの、工藤君？」

「え？」

「ああ・・・まあな。」

「へえ。東京の友達なん？」

「幼馴染・・・」

「だからさっき・・・」

楓は思い出したように呟いた。

「でも、律儀に生徒手帳の中に入れとんのやね。  
よっぽど大事なん？その子。」

「まあな。」

顔を赤く染める。

ズキンッ

「え、今の何？」

「どうかしたん？楓ちゃん。」

「ううん。なんでもない。」

自分の胸の痛みに楓は？マークを浮かべた。





Love・・・18 写真の中の女の子（後書き）

おはようございます。

桜桃です！！

楓ちゃんの名前の由来はですね・・・何を急に・・・  
ただ、植物の名前にしたかっただけです。  
蘭に対抗して・・・

ってことで、次回も宜しくです！！

Love . . . 19 見かけによらず

「起立、礼、着席。」

「あれ、工藤は何処に行ったんや。」

「わかりまへん。」

「あいつ、サボりか？」

「Did it carry out if you please？」

「今日は本場の先生が来てくれたいうのに  
あいつは . . . 内申点がた落ちやぞ . . . 。

先生の言葉に楓はピクリと反応した。

「先生！さっき工藤君、トイレに行ってたんです。」

まだ出てきてないんじゃないでしょうか？」

「そうか？」

「私、呼んで来ますね。」

ドアの前で叫ぶんで、中には入りませんよ。」

「お、おいっ白石!!」

「ナイスやね、楓ちゃん。」

「これで工藤君の内申下がらんわ・・・  
楓ちゃんに感謝やね。」

楓の心のうちが読めたのか、

一同は楓に感謝した。

「じゃ、まず挨拶からいこう。」

Hello・」

「Hello・」

「I am an English teacher. These children are my students.」

私は英語教師です。この子達は私の生徒です。

「It understands a glance in case of a wonderful student.」

素晴らしい生徒だと一目でわかりますよ。

「Is it true? I also think so.」  
本当ですか？私もそう思います。

「き、聞きとれんのやけれど・・・」

「あ、あたしも・・・」

「・・・てな具合だ。」



カチャ

「あー、やっぱり居た!!」

「し、白石・・・」

「新一くん、お昼とか此処にいるよね。」

「ああ、まあな。」

「そんなことより、授業サボっちゃだめじゃない！  
まだ中学生よ?」

「めんどくせーんだよ。」

「レベルが合わないって?」

「そーゆーこと。」

「今ね、英語の授業なの。」

「へ〜。」

「新一くんなら、素晴らしい会話をしてるって信じてるよ?」

楓はにこりと笑った。

「何が言いてーんだよ。」

「教室に戻るわよ。」

「だから・・・」

「まさか、英語できないの?」

「いや、できるけど・・・」

「だったらさ、いけるよね?」

「行かないんだったら私、新一くんが英語できないって思っけど。」

意外と負けず嫌いな新一。



「はあ。わかったよ、行けばいいんだろ。」

「じゃ、行こう。」

「・・・白石って意外とちゃんとしてんだな。」

「意外とってところが余計。」

「わりい、わりい。」

ガラッ

「せんせー！工藤君のお腹の調子が良くなったみたいでーす。」

楓は大きめな声で言いながら入った。

「おお、せやったらはよ座れ。」

「はい。」

「おい、お腹の調子ってなんだよ・・・」

「お腹が痛いってことにしておてあげたのよ。」

「サボりだってバレなくてよかったでしょ？私のおかげよ。」

楓は得意げそうに笑う。

「へー、そりゃあどうも。」

小声で話しながら席に座った。

「じゃ、工藤、白石。

今は会話をやっていたところや。

英語は出来るか？」

「一応・・・」

「私もできますけど・・・」

「It is said that both of English  
can be done.」

2人とも、英語が出来るそうです。

「Well, it is wonderful!!」

まあ、素晴らしい!!

「じゃ、早速やってもらう。

1人ずつ、カーター先生と会話してくれや。」

「カーター先生？」

「あの金髪美女のことよ。」

「ああ・・・」

「じゃ、工藤から。」

「Hello .

I would appreciate your favor .

Mr . Carter .

こんにちは。宜しくお願いします。カーター先生。」

「Hello .

It is very well just here .

Mr . Kudo .

こんにちは。こちらこそ宜しく。工藤君。

「obtaining? what a name . . .

え？何で名前を・・・

「It heard the point from the teacher .

She is Mr . Shiraiishi .

Does he associate?」

先ほど、松瀬先生からお聞きしたの。彼女は白石さんよね。付き合っているの？



(本当に教師かよ・・・)

「んじゃ、そろそろ交代やな。

皆、どんな話しとるか、わかったか？」

シーン

「いないみたいやな・・・。じゃ次は白石。」

「は、はい。」

「Hello .

A pretty young woman .」

こんにちは。可愛いお嬢さんね。

「Thank you .

Mr . Carter is also beautiful .」

有難うございます。カーター先生もお綺麗ですよ。

「Thank you .」

ありがとう。

淡々と会話する。

「あの2人、ほんま凄いわ・・・平次、英語わかる？」

「まあ・・・」

「だったら何でさっき手あげへんかったの？」

「めんどくさかっただけや。」

平次の言葉に和葉は呆れるばかりだった。

L o v e . . . 1 9 〽見かけによらず〽 (後書き)

次回もどうぞ宜しくお願いします。



Love・・・20 胸の高鳴りが多い。」

「白石。」

「え？」

「俺さ・・・ずっと、白石が好きだったんだ。」

「本当に？新一くん・・・」

それは、突然の出来事だった。

「初めてあったときから・・・なんか気になっておせっかいやきなところも全部好きだ。」

「私も・・・新一くんが好き。」

「付き合ってくれるか？」

「うん!!!」

その瞬間、草むらから沢山の人が出てくる。

「よかつたな、楓ちゃん！」

「2人とも、あ似合いやで!!」

「キスでもしろや、キスでも！」

「ええ？」

「俺は、いいぜ・・・」

「新一く・・・」

振り返ると、そこには新一の姿ではなく・・・

「ウキ？」

「ち、ち、ち、

猿  
|  
-  
-  
-  
-  
-  
!  
!  
!  
!  
?  
?  
?  
?  
「

ハ  
ッ

「何だ、夢か・・・」

時刻は7時30分。

「なによー、まだ7時半・・・  
え？7時・・・半？ち、遅刻ーーーー！！」

楓は頭を抱えた。

ダダダダダッ

すばやく着替えて居間へ降りる。

「お母さん！何で起こしてくれなかったのよ！」

「何回も起こしたわよ。

それなのに、全然起きないんだもの。

ずっと、え？え？って寝言いうし・・・。」

「もう！起きるまで起こしてよね！-」

「夜遅くまで漫画見てるからよ。」

（そうだ・・・）

それは、恋愛漫画だった。

しかも、楓がみた夢と同じように告白するシーンだった。

「だからあんな夢を・・・」

「それより、いいの？朝ごはん。」

「食べてる暇ないわよ！！」

「んじゃ、いつてきまーす！」

「気をつけてねー！」

・・・それにしても、新一くんって誰かしら。」

走る楓の後ろを見て、母は呟いた。

ガラッ

「ギリギリセーフ!!」

「セーフやない。」

「え？」

「遅刻や。白石。」

「そんなあ。」

ガラッ

「セーフ!」

「またか・・・  
アウトやぞ、工藤。」

「なんだ・・・走って損した。」

「おいおい・・・」

「まあ、今日の英語の授業であることが出来たら・・・」



遅刻を帳消しにしてもええぞ。」

「え？本当ですか？？」

「出来たらやけどな・・・。」

英語教師兼担任の松瀬はにやりと笑った。

「「？」」

「えー今日は、いつも来てくれたカーター先生が風邪で休んだ。それでなんやけど、フランスの先生が来ることになったんや。」

「えー!?!」

「なんや、それ!?!」

「横暴や!」

「予習くらいさせてくれ!」

「あー、ごちゃごちゃうるさいんじゃない?」

シーン

「そういうことで、アリス先生や。」

Alice le professeur entre si

l v o u s p l a ? t .  
」

アリス先生、お入りになってください。

「松瀬先生、フランス語話すことできるんやね。」

「知らなかった・・・」

「B o n j o u r , t o u t l e m o n d e .  
」

みなさん、こんにちわ。

「ぼ、ぼんじゅーる・・・」

「おいおい、日本語やと通じへんぞ!」

「そないなこと言ったって、先生」。

「あたしら、フランス語知らへんもん。」

「そうや。ここであいつらの出番やで。」

「まさか・・・」

「工藤、白石。今日はフランス語でアリス先生と会話ができたら・・・  
遅刻を帳消しにしてやるぞ」。  
「」

「そんなあ。」

「本当に、してくれるんですね？」

「当たり前や。」

「どのようなテーマで？」

「そうやな～・・・俺について。なんてどうや？」

「わかりました。」

新一の笑みでクラスの皆に驚きがはしる。

「工藤君、フランス語できるんやね。」

「平次、あんたは英語しかできへんの？」

「いや、一応フランス語は齧る程度ならできへんこともないけど・・・」

「だったら、楓ちゃんのためにやったり！」

「はあ！？」

「楓ちゃん、できそうにないし・・・」

「だからって、何で俺が・・・」

「平次くん、腕の2、3本折りたい？」

「やらせて頂きます。」

「先生！平次が楓ちゃんの代わりやる言ってるのやけど、それでもええ？」

「・・・ま、しゃあない。」

「ほら、平次！前に行ったり。」

「はあ。」

平次は盛大なため息をついた。

「服部、お前やるのか？」

「少しならできへんこともないって言うたら・・・」

「和葉ちゃんか。」

「腕を2、3本折りたいかって脅されたわ・・・」

「そりゃ語愁傷様。」

「じゃ、工藤からスタート！」

ドキ

（改めて今日新一くんの顔見たけど・・・ゆ、夢を思い出しちゃう・・）

「Bonjour, Alice professeur」.  
こんにちわ、アリス先生。

「Bonjour. Est-ce que c'est Shinichi Kudo?」  
こんにちわ。工藤新一くんね？

「Oui」.  
はい。」

「De quel est-ce que vous parlez?」  
z?」

何について話しましょうか？

「Je parais ? tre responsable du  
th?me .  
Est-ce que je suis soudain ,  
mais comment au sujet de la p  
remi?re impression de M . . Mat

suse?」

テーマは担任についてだそうです。突然ですが、松瀬先生の第一印象はどうですか？

「Bien, je pense que c'est une  
personne comme...  
homme. Je parais ? tre tendre  
t」

「へー、よかったですね。松瀬先生。」

にこりと笑う新一。

ドキン

（もう、その笑顔は反則だって！！）

「え？何、何？なんて言うたん！？」

「アリス先生から見ても、松瀬先生は男らしくて優しいそうや言うてたんや。」

「えー嘘！」

「嘘言っつな！アホ！！」

「Est-ce que c'est donc? Merci.  
そうですか。ありがとうございます。」

「よし、工藤に拍手!。」

パチパチ

ふうと、新一は息をはく。

ドキッ

(今日は新一くんのいろんな動作に反応しちゃう・・・  
やっぱり、夢のせいかな・・・。)

「じゃ、次は服部やな。」

「ほーい。」

やる気なさそうに答えた。

「Je pense le M... Matsubase? tr



e l e t y p e q u i n ' e s t p a s  
p o p u l a i r e a v e c l e s f e m m e s . C ' e s t  
. . a u s u j e t d e l u i .

俺は松橋先生は女にモテないタイプだと思います。それについて・・・

ボカツ

松瀬は平次の頭を思いつきり殴った。

「いつ・・・」

「そのへんで終わりや。」

「俺、まだあんまり話してへん・・・」

「話さんでええ。」

「でも・・・」

「ええから!!」

白石の遅刻は帳消しにするから、文句は言うなや。」

平次はたんこぶを摩りながら席に座った。

(私、今日なんか胸を高鳴らせたかわからないな・・・)

L o v e . . . 2 0 〵胸の高鳴りが多い。〵（後書き）

まだまだ自分の恋心に気づいてない楓ちゃんです・  
いつ気づくのでしょうか？

次回！

L o v e . . . 2 1 〱あの頃のまま〱（前書き）

蘭のところへ戻ってきましたー

蘭視点です。

Love・・・21　　あの頃のまま

ねえ、新一・・・

今、どうしてる？

あのまま、貴方は寝てますか？

それとも、目を覚ました？

会いたい。

って思ってしまう自分が悲しくてたまらない。

園子、志保。

黙っていつてゴメン。

新一と・・・仲良くしてるかな。

「ほなみ!!」

「あ、みなみ・・・」

「明日さ、一緒に遊びに行かない？  
あたしん家においでよ！！」

「え？いいの。」

「うん。」

「うん、行く！」

こっちに来てはじめての友達・・・

でもね、やっぱり園子や志保を超える親友はできないみたい。

だめだね、私・・・。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

ピンポーン

「いらっしやい！

騒がしいだろうけど、あがつて？」

「お邪魔します。」



ダダダッ

「お友達？」

「そう。だから、うるさくしないでね？」

「はい。」

「妹さん？」

「そう。うるさいだろうけど、ごめんね。」

「全然。」

「私一人っ子だから、うらやましいな。」

私の言葉にみなみは信じられない。という顔をした。

「下の子もね・・・小さいときは可愛いのよ。」

「弟も妹もさ・・・でも、今となったら生意気よ。」

「そう？」

「うん。やっぱり、上にいるせいか口が達者！」

「へえ。」

「まあ、居なくていい。なんて思ったことはないけどね。」

「そつか・・・」

心が少し、温くなる。

「これさ・・・あくまでも私の推測なんだけどね。」

「うん。」

「言おうか言わないか迷ってたの。」

「何を？」

みなみが口を開くと同時にチャイムが聞こえてきた。

「ナイス、タイミングだね。」

みなみは「ちょっと待っててね。」と言うと、階段を降りていった。

ねえ、新一……

今のね、大切な友達なんだよ。

貴方にも紹介したいな。

大人のな発言をして、精神年齢が高い　みなみ。

面白くて、個性的なムードメーカー　玲奈。

明るくて何にでも挑戦する　真帆ちゃん。

大人しいけど、本当は話しが大好きな　実音ちゃん。

怖いけど、本当は優しい　美梨ちゃん。

発言も趣味も何もかも古いけど凄く面白い　東くん。

すごい天然で鈍感な　清矢くん。

ここに、新一や園子、志保が居たら数倍楽しいんだろうね。

私の中の貴方は、小学校5年生の時で止まってる・・・

今もあの頃のまま・・・

L o v e . . . 2 1 　くあの頃のまま　（後書き）

蘭はまだ、新一を思っているのです・・・。

Love・・・22 ｝好きって気持ちは無限大｝

ピピピピッ

ピピピピッ

「んー・・・」

蘭は寝ぼけながら目覚まし時計をOFFにした。

「・・・おはよう、新一。」

まだ幼い、彼の写真を見ながら蘭は呟いた。

「おはよう、お父さん！」

すぐに朝食の準備するから待っててね。」

「ああ。」

「でもさー、お父さん。

そろそろお母さんの手料理が懐かしいね?」

「あんな飯、食えるか!」

「はいはい。」

蘭は笑いながら台所へ入っていった。

ジャー

(もし、事故なんてなかったら・・・  
今頃・・・あー、やめやめ!そんなこと考えないの!!!)



「はい、お父さん。

じゃあー、いただきますーすー!!」

「お父さん、行ってくるね！」

「おお、気をつけろよー。」

「はい」

玄関に出ると、腰にあるボタンを押す。

これで、『村崎 ほなみ』の出来上がり。

「今日も一日頑張るわよ！私！！」

「ギャッ」

近くに居た猫がおびえる。

「あー、ごめんね。」

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「おはよ！ほなみ！！」

「はよー」

「おはよう。みなみ、玲奈。」

「いつも思ってたけど、ほなみってポニーテール以外の髪型にしたりしないの？」

「うん。」

「へえ。」

（村崎ほなみはポニーテールだもん。

まあ、空手をやるときもこれだったけどね。）

「うつ・・・うつ・・・」

楽しそうに話している傍で泣いている女の子がいた。

「どうかした？」

泣いているのは同じクラスの藤堂夏樹。

「あ、うつん・・・」

「何でもないわけ、ないじゃん！

教室で泣いてたら変に思われるよ、取り合えず向こう行こう？」

「うん・・・」

「目のつかないところへ行くと、夏樹は口を開いた。

「実はさ・・・うち、他中の人が好きなんだよね。」

「うん・・・」

「でも、彼女いてさー。」

もう、どうしよう・・・なんか胸が押しつぶされそうだよ・・・」

「そっか・・・」

「ごめん。こんなこと言ってもしょうがないのにね。」

「ううん。」

玲奈たちも立ち入ったこと聞いてごめん。」

「・・・夏樹ちゃん、その人のこと・・・好きなんだね。本気で。」

「うん。」

「好きになるって簡単だけど、両思いって難しいね。」

ほなみは窓の外を眺めながら言った。

「好きになって・・・好きになって・・・  
好きっていう気持ちにゴールもないもんね。  
スタートはあっても・・・」

「ほなみ・・・」

「無限のループだね・・・恋ってさ。」

「・・・ほなみ、ありがとう。」

「え？な、何が？」

「て、いきなり、何を・・・」

「なんか、その言葉聞いたら元気出ちゃった！」

「へ？」

「そうだね、すきって気持ちに終わりなんてない！！  
それに、恋にもゴールはないよね！！  
うち、他の恋を見つけるまで・・・あの人を好きで居続けるよ！！  
ありがとう！！！」

「あ．．．うん。」

笑顔で手を振る彼女に啞然とする3人だった。



L o v e . . . 2 2 　く好きって気持ちは無量大く（後書き）

今日も予約更新の桜桃です！

今日といえば・・・職場訪問！してると思いますね。  
どんな感じなんだろう・・・私。

次回もよろしくです！

L o v e . . . 2 3 　　くそれって恋？く（前書き）

新バージョンです！！

行き来が激しくて申し訳ありません．．．><

Love・・・23 〵それって恋？〵

「ええなあ。楓ちゃん。」

「え？」

「だって、素敵な彼氏おるんやもん。」

「彼氏？誰が。」

「工藤君。楓ちゃんの彼氏やろ？」

「・・・」

「はあああああ！？」

「え？ちゃうの？」

「違うわよ！！新一ちゃんと私はただの友達！！」

「え、でも・・・女子で新一くん言つとるの楓ちゃんだけやし。付き合ってるもんやと思つてたわ・・・」

「友達よ、友達。」

自分で言つと、だんだんむなしくなってくる。

「友達」という単語が胸に突き刺さる。

「じゃあ、あたし本気で工藤くん狙おかな〜。」

「え？」

「三郷ちゃん、工藤君が好きやったん!？」

「うん。転校初日から一目ぼれやで。」

「ええ〜ずるい!!あたしやで、好きやったんやで。」

「あたしも!ずっと楓ちゃんと付き合ってる思ってたし・・・  
絶対適わん思っで、諦めとったんや!!」

「あたしも。付き合ってるんじゃないなら、狙ってもかまわへんよね？」

「え・・・」

( ) どうしよう、それは・・・嫌。( )

「きっと、楓ちゃんと付き合ってること、バレたら工藤くん  
争奪戦やね。」

「あたし、絶対工藤くんを射止めてみせる!!」

「無理無理。あたしみたいな美脚で攻めんと!!」

「ちゃうちゃう。性格第一やで!!」

次々に自分をアピールし始める。

「だ、だめ――――！！」



「え？」

「どないしたん？」

「楓ちゃん？」



「わかんない・・・でも、新一くんを取られるのは嫌だから・・・アプローチなんてしないで・・・」

「楓、ちゃん・・・」

「ごめんね。」

「こんなこと、私が言うことじゃないんだけど・・・でも・・・嫌なの・・・どうしようもなく。わがままだよね・・・」

「・・・楓ちゃん、恋しとるんやね。」

「恋？」

「工藤君を好きなんやろ？」

「好き？」

「好き。」

「ええ!?!」

「恋しとるんよ。楓ちゃん。」

(わ、私が……?)

きよんとする。

「不思議……」

「一歩大人になったんやね。楓ちゃん!」

「そう、なのかな……」

楓は空をぽーっと眺めた。

L o v e . . . 2 3 〵それって恋？〵（後書き）

次回を宜しくお願いします！！

L o v e . . . 2 4 くクール (前書き)

今度は新一バージョンでも蘭バージョンでもありません!!  
懐かしのあの2人バージョンです。

「志保〜。」

「どうかしたの？」

「この問題、教えて。」

園子は数学の教科書を出した。

「ああ・・・ここはこうして・・・これをここに当てはめれば・・・」

「・・・できちゃった。」

「それ、コツさえわかれば簡単なのよ。」

「・・・それにしてもさあ、志保。  
眼鏡、チヨ〜似合ってるね。」

「そう？ありがとう。」

「なんでかけてるの？目が悪いわけでもないのに。」

「なんとなくよ。授業中だけね。」

「ふうん。」

園子は珍しそうに見る。

「学年トップで、美人で、クール……  
志保はマドンナ的存在だもんねえ。なんていうかさ……」

「そうかしら。」

「蘭とは違う魅力があつて……」

「……蘭、どうしてるかしら。」

「だよね……新一くんも転校しちゃったし……  
会いたいな。」

「本当よね。」

小さく息をはいた。

「あ、あのさ……」

「」「？」「」



後ろから話しかけてきた男子がいた。

「えつと・・・三村くんじゃない？」

「三村・・・？ああ、三谷さんがカッコいいとか言っていた・・・男子バスケット部の・・・」

「そうそう！イケメンだつて騒がれてるんだから！」

「・・・工藤君が居たら薄れるタイプね。」

「やめなよ志保。あの男と比べたらかわいそうだつて。新一くん、顔と頭とスポーツだけはいけてるんだからさ。」

「随分な言いようね・・・」

こそこそと話す園子と志保。

「あ、あのさ・・・それで・・・」

「何か用かしら？」

「僕と・・・付き合ってくれないかな？」

ここは教室。

中には運良く、園子しか傍には居なかった。

「・・・いいわよ。」

「え？本当に？」

「ええ。」

「し、志保・・・あんた本気なの？」

園子は目を丸くさせた。

「どこまで？」

「え？」

「米花町内までなら付いていくわよ。」

「ああ・・・そういう意味。」

園子は納得したようにつぶやく。

「そうじゃなくて・・・」

「間違っても大阪には行きたくないから。

それと・・・日焼けする場所、疲れることは私としては避けたいわね・・・。」

「そのところ考慮して？じゃ、日程が決まったら教えてちょうだい。」

園子、行くわよ・・・」

「あいつさー！」

啞然とする少年を置いて、教室を出た。

「志保って意外に天然ボケ？」

「違うわよ。蘭じゃないんだから。」

「だよねー。」

「あれは、断るときの必勝法。」

「なるほど。」

「あの台詞を言って、誘ってきた男はいないわ。」

「おお。」

「いっになく、クールな志保ちゃんが見れたね。」

「嫌味に聞こえるわよ。」

「だって、半分は嫌味だもん。」

園子は面白そうに笑った。

L o v e . . . 2 4 くクール (後書き)

中学二年生の・・・

園子と志保ちゃんでした・・・！

今日は・・・

生徒会のメンバーでの打ち上げ会  
そのため、お昼までいませんー！

L o v e . . . 2 5 ｝会いたい｝（前書き）

新一視点です。

Love・・・25 ｝会いたい｝

蘭・・・

元気か？

結構楽しいぜ、大阪はさ・・・

楽しいと感じれば感じるほど

蘭に会いたくなる。

なんでだろうな・・・

やっぱ、好きだからかな・・・

こんなこと、恥ずかしくて誰にも言えねえけど・・・

今会ったら、また子供じみたことしちまうかもな。

照れて、つい、憎まれ口をたたくかもしれない。



好きという2文字もいえないんだ。

「新一くん？」

心配そうに白石が俺の顔をのぞいてきた。

「どうかした？窓なんて見て・・・

今日、珍しく部活ないんでしょ？

せつかく早く帰れるのに・・・もったいないよ？」

「そういう白石こそ、部活休みだったんじゃないの？」

「あ、あたしは・・・授業のわからないところを先生に質問してて遅くなったの！」

「へえ、真面目。」

「不真面目じゃないところは確かよ。」

白石ってさ、どこことなく蘭に似てるんだ。

こんなこと、言えないけど・・・

まあ、違うといえば・・・

白石は意外と敏感だったこと。

蘭は結構鈍感だったしさ。

「夕日、綺麗だね。」

「そうだな・・・」

蘭もこの夕日を見てるだろうか・・・

蘭・・・もう一度会いたい。

俺はそんなことを思いながら、夕日を見つめていた。

L o v e . . . 2 5 ｝会いたい｝（後書き）

次は楓ちゃん視点です!!

L o v e . . . 2 6 　　く締め付けられるほどく（前書き）

楓視点です！

Love・・・26　く締め付けられるほどく

偶然を装って新一さんと帰ろうと考えた私は  
ずうっとロッカーの傍で待っていた。

『あれ、白石・・・』

『あ、新一くん・・・今帰り？』

『ああ、まあ・・・』

『じゃ、一緒に帰らない？私も今帰ろうとしてたところなの。』

つというのが私のプランだった。

でもなんで私・・・新一さんと帰りたい。

なんて思ってたんだろう・・・。

遅い。

遅すぎる。

かれこれ、  
一時間はまった。



何してるの〜!?

もう帰っちゃったのかなあ。

私は、新一くんのロッカーを申し訳ない気持ちであける。

「なーんだ、居るんじゃない。」

あれ、だったらなんで、まだ帰ってこないの?」

頭の中をフル回転させた。

「・・・教室に、いるのかな。」

サ  
ア  
ア  
ツ

教室から冷たい空気が流れる。

なんたつて、もう・・・秋。

そろそろ雪が降ってもおかしくない時期だ。

「さむっ・・・」

教室をのぞくと、窓の外・・・夕日を眺める新一くんが目に入った。

「綺麗・・・」

なんとなく、眩いてしまった。

男の子を、綺麗だと思ったのは初めて。

夕日の光を浴びて、それを見つめる彼の瞳・・・

吸い込まれるかと思った。

「新一くん？」

なんだか、新一くんがどこか遠くへ行ってしまいそうな感じがした。

何か、いつもと違う。

夕日を愛おしく見つめる新一くん。

誰を考えてるの？写真の彼女？

疑問と不安でいっぱいになっていく。

「どうかした？窓なんて見て・・・  
今日、珍しく部活ないんでしょ？  
せっかく早く帰れるのに・・・もったいないよ？」

「そういう白石こそ、部活休みだったんじゃないの？」

ギクッ

とした。

バ、バレてないよね？私がずっと待ってたなんて・・・

「あ、あたしは・・・授業のわからないところを先生に質問してて遅くなっただの！」

「へえ、真面目。」

「不真面目じゃないところは確かよ。」

ドキマギした気持ちを抑えて・・・

冷静さを装い、皮肉っぽく言った。

フッ

と新一くんの笑みが微笑みに変わる。

あ・・・

まただ。

すごく不安が募る。

ねえ、新一くん・・・あなた今・・・私を見てない。

私を通り越して・・・誰を見てるの？

私は・・・私だよ？

「夕日、綺麗だね。」

見ていられなくて、話題を無理やり変えた。

「そうだな・・・」

そして・・・また。

新一くんの表情が変わる。

胸が締め付けられるほどいたかった。

キュウツと

紐でしめつけられている感じだった。

痛くて、涙が出る。

新一くん・・・

私ね、  
わかったよ・  
・  
・

貴方が好き。





L o v e . . . 2 6 　く締め付けられるほどく（後書き）

ようやく気づいた自分の気持ち！！

楓ちゃんも一歩、大人になったのです・・・！

L o v e . . . 27 　　く嵐を呼んだ2人く

新一だけじゃない。

皆、いつものように過ごしていた。

毎日、同じように時間を使っていた。

今日だけ、特別何かしたわけでもない。

ただ、普通に．．．普通に同じ時間を過ごしていたただだった。

ガラッ

「なんやのー、騒がしい。」

「もうちょい静かにドア開けられへんの？」

「そ、それどころやない！」

「？」

「て、転校生やー!!」

「はあ？」

「また、ここのクラス！」

何でも、転校してくる子がこのクラスがええ言ったらしいんよ！」

「へえ。」

「しかも、女の子!!で、2人やて。」

「2人って・・・このクラスだけ大人数やんけ。」

「せやね・・・。」

嬉しいのやら、なんやら・・・という気持ちでいっぱいだ。

「かわええんかなあ。」

「まあ、どっちにしても、アンタに振り向くことはあらへんね。」

「んやとお、ブス!!」

「どーせ、ブスですよ。アホ!!」

「アホ言つなや!!」

どこかで喧嘩する。

「・・・平次、また転校生やて。」

「いろんな時期転校してくるやつがおるんやな。」

「うん・・・。」

どこから来るんやろね?もしかしたら、楓ちゃんの友達・・・とかやったりして。」

「そうかな?だったら嬉しいけど。」

「工藤君は転校生が気になったりせえへんの?」



「工藤君？」

「え？あ・・ごめん。  
で、何の話だったっけ？」

「工藤君、疲れとる？」

「いや、そんなことねえよ。大丈夫。」

「ほんま？せやったらええんやけど・・・」

和葉は心配そうに顔を覗き込んだ。

「お前に心配されてもなあ・・」

「平次、文句である？」

「文句なんかやないわ。」

「じゃあ、なんやの！？」

「まあ、まあ。2人とも・・」

楓がなだめたとき、ドアが開いた。

「おー、座れよお。」

「先生、転校生が来るってほんま!？」

「ああ、そうや!じゃ、早速自己紹介してもらおか。」

松瀬は「入ってええで!。」と呼びかけた。



「うわ、結構かわえんとちゃう?」

「っていうか、べっぴんやね。」

惚れ惚れした口調で口々につぶやいている。

「鈴木園子でーす！帝丹中から来ました！

そこに居る工藤新一くんとは、小学校のとき一緒でした  
以後、よろしく」

「宮野志保。以下、鈴木さんと同文です。」

「そ、園子……それに、宮野……!？」

「やつほー、新一くん！」

「やっぱり、変わらないのね。」

相変わらず、蘭がいなくてなにもできない。  
ってところかしら？」

「相変わらず可愛くねえやつ・・・」

「あら、褒めてくれてありがとう。」

このやり取りにただひたすら？マークを浮かべる  
クラスメイトたちだった。

L o v e . . . 2 7 〽嵐を呼んだ2人〽（後書き）

なぜ園子と志保ちゃんが．．．！？

それは、次回！！

L o v e . . . 2 8  
）関係）（前書き）

「鈴木は白石の前。

宮野は工藤の隣や。」

「はい。」

園子は上機嫌。

志保は相変わらずクール。

「また、隣ね。」

「あーそうだな。」

志保の言葉に新一は呆れ声で答えた。



）  
休み時間  
）

「・・・で、なんでオメーラがここにいんだよ！」

「だって、新一くんに会いたかったんだもんね、志保。」

「ええ。突然よ。」

大丈夫、博士には了承得たし。」

「鈴木財閥の勢力で新一くんがどこにいるか突き止めた。つてわけ。」

「・・・はあ。」

宮野、お前まだ宮野だったんだな。」

新一は呆れ、無理やり話題を変えた。

「ええ、まあね。」

「阿笠志保・・・でも似合ってると思うけど。」

「博士のところに引き取られて随分たったよな。」

「私も、阿笠志保になる気でいたんだけど・・・博士が、やっぱり宮野家の人間として生まれたから・・・って。宮野志保のままにしてくれてるの。」

「ふうん。」

大体の話の区切れがついたとき・・・

ここぞとばかりに三人の周りに群がった。

「ねえ、鈴木さんと宮野さんって工藤君とどういう関係なん!？」

「帝丹っていうてたやん、やっぱり友達!？」

「もしかして、付き合っとなるん!？」

次々に話題が飛んでくる。

「そうねー。私と新一くんは小学校一年生からの付き合い。

志保は三年生のときに転校してきて以来・・・かな。

そんとき新一くんと志保が隣同士で・・・。」

「あんときはお互いの第一印象最悪だったよな。」

「ほんとよ。私、絶対気が合わないって思ってたもの。」

「それは俺の台詞だね。」

「お互い陰悪な雰囲気であ。私と蘭がいなかったら、今頃2人はどうなってたか。」

「蘭・・・って?」

「ああ。新一くんと一番仲の良かった・・・子。」

園子が懐かしむような目をする。

「その・・・蘭ってどんな子なの?」

楓はおそろおそろ、聞いてみた。

「そうね・・・とっても優しい子だったよね。」

「ええ・・・なんでも自分で背負い込んでるような・・・」

小学生だったのにね。」

「くだらねーことだったらすく泣くくせに、  
本当につらいとき、絶対泣かねえんだよな、あいつ・・・」

「あら、惚気え？新一くん。」

「バツなんじゃねえよ！！」

新一のそんな姿に楓は心を痛めていた。

L o v e . . . 2 8 〱 関係〱 (後書き)

「会いたくなつたから来た。」  
という園子と志保ちゃん!!

まさに、嵐を呼ぶ2人!!

次回は蘭サイドです

L o v e . . . 2 9    〈大人の発言〉（前書き）

蘭視点です。

私の出席番号は後ろなのだが・・

人数調整のため、みなみと未来ちゃんの席にいた。

え？

なんの席？

それは、理科室の席。

出席番号順に座るの。

で、さっきも言ったとおり・・・

出席番号が早いみなみと未来ちゃんの隣の席に

人数調整のため・・・座らされている。



「今日も実験！楽しんでいーわー。」

「未来ってばいつでもそればっか。」

「だって、いいと思うでしょ!？」

「実験も大変だと思うけどね。」

「いつつもやってるの、私とほなみと志木君と和だけじゃん。」

「未来はやりたくないから!。」

「あー、はいはい。」

みなみはめんどくさそうに言った。

「じゃ、実験の説明するから前に来て。」

先生の言葉で皆は前に集まった。

「んで、これをこれにつなぐ。」

「え、それって磁石？」

「そう。で、これをー・・・未来、聞けよ。  
で、これはこれで・・・電流を流して・・・」

先生が説明する。

「それで・・・これがこうなるでしょ？」

・・・未来、聞いているのか？何回も同じこと言われるな。」

「聞いてます。」

「聞いてます・・・お前、ふざけてるのか！？」

ふてくされたように「聞いてます。」と言った未来ちゃんはとうとう怒られた。

「お前明日、職場体験で保育園行ってくるんだろ！？  
そこで何教えてくるのよ？」

先生の話を聞かない子の先生の言うこと聞きなさいって言うてく  
んのか！？」

「・・・」

「そんなふて腐れるんだったら、明日行くな！  
行かないほうがいい。」

先生の言ってることはもつともだった。

「先生の話听不懂の子に先生の言うこと聞きなさいって・・・  
お前はいえないだろ？って話しなんだよ。」

自分が出来てないのに、他のやつにはいえないだろ？ってことなんだ。

わかるか？」

「・・・はい。」

「・・・そんなあいまいな返事しかできないんだったら、話すだけ無駄だな。」

先生はそう言って、時計を見た。

「もう実験できる時間じゃねえな・・・はい、片付け。」

残念そうに皆は席に着いた。

隣の未来ちゃんはぶつくさ言いながら席に座る。

「つたく、キモイ。マジでキモイ。  
いっぺん死んで来いっ」

「まあまあ・・・」

私はなだめる。

「別に未来、明日いかねえし。」

未来ちゃんはずっと文句を言いつ放しだ。

「未来はまだまだ子供だな。」

みなみが言う。

「ハア？」

「まあね、確かに先生の言ってることをそんな風に受け止めちゃうよね？」

人に指摘されたところを、だめだなんて思っただけで直すことなんて簡単じゃないと思う。

みなみだってできないよ。」

みなみは淡々と話す。

「指摘されたところを直すって新たな自分を作るってことでしょ？それってものすごく力のいることだね。」

だから、すぐにやれ。なんて言わないけどさ・・・

でも、先生の言われたことはもっともだと思っよ。」

「そうだけどさー・・・」

「ほら、未来だっただけ認めた。」

だったら、そんなに文句言うことじゃないよね？」

「文句言う筋合いあるし。」

「なんで？」

「アイツキモイもん。」

未来ちゃんの言葉に頭が痛くなりそうだ。

「でもさ・・・さつき先生に言われた言葉・・・  
少しでも飲み込んでみたら？」

「・・・」

「さつき先生に言われた言葉は、必ず未来を大きくしてくれるよ。」

みなみの言葉にんだか、心を打たれたような気がした。



〕授業終了〕

「みなみ、精神年齢いくつ？」

「43。」

「え！？」

「この間さ、心理テストみたいなのしたら、それくらいだったの。自分でも驚きー。」

そう言うてにこやかに言うみなみに私は苦笑いしてしまった。

Love・・・29 大人の発言（後書き）

みなみが言ったような言葉を・・・

ああ言う状況で言ったんですね、

したらやっぱり、黙った・・・うん、黙った・・・。

それであの子が未来が変われたか・・・って言うたら・・・

微妙なんですけどね。^^；

Love・・・30 ｝理解不能

チュー

園子はバナナミルクを飲んだ。

「私、蘭にもう一度会いたい・・・」

「そうね・・・かれこれ、4年間ちかくあつてないものね。」

「でも・・・お前らのことだから俺よりも蘭に会いに行くと考えた。」

「どういう風の吹き回しだよ。」

新一の口から出る「蘭」という単語に楓は胸を痛めた。

「あら、蘭のほうを真っ先に探したわよ。」

「でも・・・見つからなかったの。」

「はぁ？」

「外国にも行っていないのよね・・・」

「ただ、一つ・・・怪しいところがあるのよ。」

「え？」

「北海道。」

園子と志保は口を揃えていった。

「北海道？」

「そう、北海道のところだけ調べられなかったのよね。  
壁で閉ざされたように・・・そこだけは調べられなかった。」

「蘭のお父さんって刑事だったでしょ？その関連で閉ざしちゃった可能性が

あるって思っのよ。」

「それでも、警察関連だけではそこまでいかないと思うわ。」

「・・・博士。」

「「え？」」

「博士もきつと何か隠してるぜ。」

「どうしてそう思うのよ。」

私、一緒に暮らしてるけど、なんの違和感もなかったわよ。」

「博士がきつと、何かしてる。」

警察関連だけで見つけれないことはねえよ・・・」

「・・・じゃあ、一つ考えられるのは・・・」

蘭が偽名を使って中学校に通ってる・・・ってことね。」

「ああ。そうとわかれば・・・俺、博士の家行ってくる。」

「し、新一くん！これから授業だよ？何も今から行かなくても・・・」

「

楓は叫んだが、新一の耳まで届かなかった。

「じゃ、私も行こうかな。」

「私も行くわよ。」

「・・・白石、わりいけど皆体調悪くて早退したって言うといてくれ。」

「お願いね。」

「・・・俺、タクシー呼ぶから。」

「行つてらっしゃい。」

「あれ？ここで呼んじゃだめなの？」

「ここ、電波が悪いのよ。」

「ふうん。」

園子が納得したようにつぶやいた。

「ねえ、なんでそこまで蘭つて人に執着するの？  
偽名まで使つてゐるってことは、会いたくないってことでしょ？  
ほっとけばいいじゃない！  
それに、会いたくないって思われて、逆に嫌じゃないの？」

「・・・白石さん・・・」

「わかつてないわね。」

「え？」

「工藤君はこの4年間。」

どれだけ蘭に会いたかったと思ってるの？」

「それは・・・」

「そうだね・・・新一くん性格からすると・・・拒まれても会いに行くと思うな。」

「どうして・・・そこまで・・・」

「好きだからじゃないの？」

まあ、彼は隠してるつもりでしょうけど・・・。」

志保の言葉が、楓の心に重く、突き刺さった。

「それにさー、新一くん元気がなくて辛気臭いのよね。こっちまで暗くなっちゃう。」

「え？元気がない・・・？」

（それどころか、元気だったような・・・）  
楓は心の中でつぶやいた。

「ほんとよ・・・」



やっぱり、工藤君には蘭が必要なのよね。」

「あんなにつらそうに笑う新一くん、初めてみたわよ。」

「だから私たち決心したの。」

「なんとしてでも、蘭を見つける……ってね。」

志保がきっぱり言い切ったとき、遠くで新一の声が聞こえる。

「タクシー来たぞー!!」

「あら、結構早いのね。」

「んじゃ、白石さん。そういうことだから。」

「早退したってこと、言っといてね。よろしく。」

園子と志保はそっぴい残し……

新一の方へと歩いていった。



L o v e . . . 3 0 ｝理解不能｝（後書き）

さあ、蘭 大搜索開始です！！

見つかるのでしょうか？

そして、楓ちゃんの恋の行方は・・・！？

L o v e . . . 3 1 　それはとても突然の出来事

それは、とても突然の出来事。

ただ、いつものように部活に通っていただけだった。

いつものように、いつものように・・・

「今日はやっぱり、全員揃ったね。」

「当たり前でしょ？休日だもん。」

「でも、昨日何人が休んだじゃない？」

「ああ、そうだね。」

いつもの会話。

「はい、内週した人ー！」

美黎が叫んだ。

「はい！」

「走ったよお！」

「んじゃ、腹筋したひと。」

シーン・

「はい、やってねえ。」

「ふあい。」

真帆は気だるそうにこたえた。

「おい、閉。」

「はい。」

「ちょい顔貸して。」

「えっ真帆、なんか悪いことした!？」

「してないから。来て。」

「う、うん・・・」

美黎は真帆を準備室へと連れて行った。

「こわっ」

「連れて行かれたの、実音じゃなくてよかった・・・。」

「実音ちゃん、そういうのは思っても言っちゃダメだよ。」

「そ、そうだね。」

そして、今日も一日がいつものように過ぎている。

でも、これから起きる出あろう出来事は・・・





あまりにも突然で・・・

L o v e . . . 3 1 〵それはとても突然の出来事〵（後書き）

こんばんわ

桜桃です。

あつという間に日曜日。

がんばって予約更新の準備をせねば．．．っ

「気をつけー、ありがとうございました。」

「「「「「「「「「「ありがとうございました!」「」「」「」

「はい、ご苦労様でした。」

部活、終了。

今日も3時間お疲れ様でした!

と皆は心の中で思っていることだろう。

すー、っとドアが開く音。

しかし、皆は気にも留めてなかった。

「今日帰ったら何しよー。」

「パソコン。」

「本読むー！」

「ねるー！」

「勉強しろよっ」

「ええ、やだあ。」

「ねえ？」

「うん。」

そして、ひと笑い。

「それにしても・・・美黎、丸くなったね。」

「えっ？顔が？」

「いや、性格が。」

「ああ、なんだー、顔がつて言ったら  
ぶっ殺してやるつかと思ったから。よかったわあ。」

「ごめん、さっきの前言撤回。」

一時期、すごい嵐が吹いていたが、今はあのときが嘘のようだった。

「知ってる？ ジャイアンって呪いなんだよ。」

「え？ 何それー。」

「ジャイアンの声優さん、一年で死んだから。」

「東君、なんでそんなの知ってるの。」

「僕が5歳の時好きだったドラマ、古畑任三郎だったから。」

「ええ！？」

「っっていうか、見る番組間違ってない？」

5歳って言ったら・・・アンパンマンでしょ、やっぱり。」

「だよねえ。」

そんなバカ騒ぎをやっていたときだった。

「ほなみちゃん、お客様です。」

先生の声に、皆はなんだ、なんだ・・・と振り返った。

「蘭。」





「しん、  
いち  
・・・  
？」



「誰？」

「ねえ、結構カッコいいと思わない？」

「・・・あ、写真の男の子だ。」

「え？」

「ほなみが持ってた写真に写ってた男の子。」

「美黎、好きになっちゃだめだよ。」

ほなみの想い人だから。」

「好きになんないよ、流石に一目ぼれはない。」

など、こそこそとした会話が繰り広げられていた。

「でもさ、なんで蘭。っていったわけ？  
ほなみでしょ？」

「確かに。東君の言うことはもっとも。どうしてだろ・・・？」

「だめ、だよ・・・私、新一と会っちゃいけないの・・・  
お願いだから、何も言わないで帰って。」

「知ってる。博士から聞いた。全部・・・」

「だったら、帰って・・・」

もう、お互いリセットしよう？そのほうがいいんだよ。」

「蘭のせいじゃねえよ。」

「え？」

「あの事故は俺の不注意。」

蘭を守って、それでもって自分の命を守れなかった俺の不注意。」

「でも・・・」

「カッコわりいよな・・・蘭を守ったはいいものの・・・  
寝たきりになっちまうなんてさ・・・」

「そんなことない！新一、カッコよかったよ！」

「どーだかな、蘭、本当は俺が嫌いで離れたんじゃねえの？  
女ってーのは、かっこいいのが一番みてえだし？」

「・・・っそんなこと、ないもん！！」

私、ずっと新一に会いたかった。でも、会っちゃいけないって・・・

ずっと思ってた・・・私がこの4年間、新一を嫌いになった日なんてないもん！」

蘭は一通り吐き出してから、ハッと我に返った。

自分のおかれた状況と・・・

自分の言った台詞を冷静に考えたのだ。

「い、今は・・・その・・・」

「本心、だろ？」

「・・・」

「蘭、帰ろっぜ。」

「でも・・・おば様に・・・」

「母さん、結構後悔してたみてえだぜ？」

「え？」

「母さんさ、俺より蘭が好きだから、

この4年間、母さんが誰よりも蘭に会いたかったかもな。」

「おば様が・・・って、新一は私に会いたくなかったんだ・  
・・・」

「い、いやっそうじゃなくて・・・今はな、その・・・」

「クスッわかってる。冗談よ、冗談。」

「まったく・・・」

新一が蘭の頭に手を置いたとき・・・

「パッパカパーン！めでたくカップルになっちゃったわけ！？  
んゝ、長かったね。うん！！」

「そ、そ・・・」

「園子？」

「あら、私もいるわよ。」

「志保！！」

「蘭、久しぶり。」

「4年間ぶり、ね。」

「うん・・・」

「まったく、心配させちゃってさ、どれだけ探したと思ってんのよ！」

「かなり苦労したわよ？博士に口を割らせるの。」



まあ・・・半分脅しだったけど？」

「・・・ごめんね。ほんと・・・ごめん。」

最後、2人に会ったら決心が揺らぎそうだったから・・・」

蘭の涙を見て2人は小さく微笑んだ。

「バカね・・・揺らぐくらいの決心ならやめてしまえばよかったのに。」

そうしたら、今頃・・・こんなに苦しまなかったでしょ？」

「・・・そうだよ。何で一言、私たちに相談してくれなかったの？話してくれたら、私どんなことがあっても蘭を守ったのに。」

「おめーなあ、なんのための親友だと思ってんだよ。何でも背負い込んでしまうの、お前の悪い癖だぜ？」

「新一・・・それ、新一に言われたくない。」

「そうね、私も同感だわ。」

「私もー。」

「おめえら・・・」

「でも・・・私、バカだよな。  
本当、ごめん・・・心配かけて。」

蘭の涙は止まらない。

「・・・蘭、心配と迷惑をかける相手こそが親友でしょ？  
どんどんかけてよ。心配！私たちそれを受け止めるからさ。」

「園子・・・大人になったみたい・・・」

「そーお？」

「蘭、気のせいよ。」

「志保、ひどすぎる・・・」

2人のテンポに蘭は笑う。

「・・・それより、2人はめでたく付き合ったわけ？」

「え？」

「だって、結構いい雰囲気だったじゃない？」

「なにそれ・・・別に・・・」

「「普通だろ？ じゃない？」」

「・・・園子・・・」

「言いたいことはわかるわよ。」

「結局、進歩してなかったのね。」

「そういうこと。」

2人は同時にため息をついた。

L o v e . . . 3 2 　　ゝ再開ゝ（後書き）

さあ、やっと再開いたしました！

さて、周りの反応は？

それは次回！！

「あのー、お取り込み中悪いんだけど、  
蘭。ってどういうこと？」

真帆が勇気を出して言った。

「あ・・・」

「やっぱり、蘭・・・偽名を使ってたのね。」

「うん・・・」

「偽名？」

「そう。私、村崎ほなみ。じゃないくて・・・  
本当は毛利蘭って言うの・・・。」

突然の出来事に目を丸くした。

「で・・・博士のことだから・・・何か仕掛けがあるんじゃない？  
とてもじゃないけど、蘭とは程遠いわよ、その容姿。」

「・・・あれじゃねえか？

俺達がまだ小さい頃、博士が遊び半分でつくったごっこ遊びの・・・  
」

「ごっこ遊び？」

「ああ。俺と蘭が博士の家に行ったとき・・・

博士が満面の笑みで俺達に渡したヒーローなりきりセットみてえ  
なのを

作ったことがあってよ・・・それはどこかにあるボタンを押せば・

・

おっと、これだな。」

新一は『ほなみ』の腰についているボタンをポチッと押した。



「え、え  
・  
・  
・  
・  
・  
」



「ええええ！？」

「なにこれ、魔法！？」

真帆が言うように、真帆のようだった。

一瞬にして、さっきまでの身なりが違う。

「っていつか、誰？」

美黎が言い分もわかる。

ほなみのときの容姿とは程遠い。

「ほ、ほなみじゃない……可愛い。」

みなみの言うことも、もつとも。

ほなみの十人並みの容姿に比べて……

ボタンを押したときの『蘭』の姿は……

ぱっちりとした大きな目。

さらさらと長い黒い髪。

細い手足。

ぷるんとした薄い唇。

シルクのような肌。

「つまり・・・村崎ほなみ。は実在しない人物ってことだよね？」

「うん・・・。ごめんね、みなみ。」

本当は言いたかったけど・・・でも、でも・・・」

「わかってる。」

で、これからどうするの？」

「えっと・・・それは・・・」

蘭が迷っていると、志保は小さく口を開いた。

「まあ、3日間くらいはここにすることになるわね。」

「え？」

「私たち、この学校へ転入手続きしたもの。」

「そうなの？」

「うん。あっちの学校一ヶ月もいなかったけど・・・  
まあ、それなりに楽しめたしね？」

「蘭が納得するまで居座ろうと思ってたからさ、

転入手続きしちゃったのよ」

明日から、クラスメイト。

ちなみに・・・2年2組。」

「え？私たちと同じクラス？」

「ええ。わざわざ同じクラスにしたのよ。」

「した？」

「鈴木財閥の権力つかちゃった。」

園子は小さく舌を出す。

「園子ってば・・・」

「まあ、パパには後で謝つとくからさ。」

目の前の出来事をまだ認識できていない

みなみをはじめとする一同は啞然としていた。



L o v e . . . 3 3 〵 全 〵 (後書き)

さてさて . . . 次回は!?

Love・・・34 〔呆然・啞然〕

「工藤新一です。」

「鈴木園子です!」

「・・・宮野志保です。」

3人の紹介が終わると口々に呟く。

「可愛い・・・」

「カッコ良い・・・」

と

「そして、ちなみにもう1人  
居なくなつて入ってくる人がいるんです!」

園子の陽気な言葉に一同は頭に?マークを浮かべた。

「居なくなつて・・・」

「入ってくる?」

「そう!ら・・・じゃない今は・・・ほなみ!」

「え?ほなみ、転校しちゃうの?」

「・・・ほなみ、はね。」

「?  
」



「えっと・・・皆さんが知っている村崎ほなみは・・・  
皆さんの前からいなくなるんです。」

そのかわり、毛利蘭っていう超可愛い女の子がやってくるからね。」

「ちょ、園子・・・可愛くなんてないわよ!」

「なあに言ってるの!」

「それに、志保とか園子のほうが可愛いと思う。」

「そんなことないわよ。」

ねえ、新一くん。蘭だって十分可愛いわよね。」

「えっと・・・その・・・  
間抜け面が最高だよな?」

「まあ、なによそれー!」

「はいはい。ストップ。」

言い合いはどうでもいいから・・・

それより、さつさと蘭を出しちゃったほうがいいんじゃないの？  
ほら、いいわけとかいろいろあるんでしょ？」

「あ・・・そうだ。」

「えっと、一気に言ってしまうと・・・  
村崎ほなみは実在しないんです。」

「・・・ええ！？」

「なぜかというと・・・」

ポチッ

腰にあるボタンを押した。

その瞬間、毛利蘭の姿へとなっているのだ。

「は・・・？」

「え、ええ！？」

「なに、神業!？」

「魔法？」

「マジック？」

「い、一瞬でよくわかんなかった。」

「ってか、ほなみはどこいったわけ？」

「ほなみー？」

「っていうか・・・あの子、誰？」

「はい、おしゃべりはそこまで。」

「ココにいるのがほなみよ。」

「はあああああ！？」

「あ・・・訂正。

ほなみと言っていた蘭。よね。」

「うん・・・。

あの、ごめん皆！今まで黙ってて・・・。  
私、本当は毛利蘭っていうの・・・。わけあって、偽ってました。  
このことは、この学年の先生と校長先生しか知らないの。」

「んじゃあ、小山先生は知ってたわけ？」

無言でうなづく先生。

「うつそお。」

「信じらない。」

「夢見たいな話だよね。」

「うんうん。」

「いろいろと申し訳ないです。」

でも・・・これからは、毛利蘭としてお願いします。」

蘭が頭をさげたとき、

率先的に拍手を送ったのは玲奈だった。

「ほな・・・じゃないくて、蘭！これからよろしく！-！」

「玲奈・・・」

「蘭、あとでその3人との関係。  
詳しく教えてよね!!」

「みなみ・・・」

そして、次々に聞こえる言葉の数々。

「ありがと・・・みんな。」

蘭は呟いた。





L o v e . . . 3 4 　　〈 呆然・啞然 〉（後書き）

さて、これから蘭としての生活のスタート!!

L o v e . . . 3 5 　　く追いかけて　　(前書き)

そのころ、楓ちゃんは!?!です。

楓は、荷造りしていた。

「楓、どうしたの？その荷物。」

「私、北海道行ってくる。」

「行ってくるって・・・」

「大丈夫よ、あそこにはおばあちゃん家があるから。」

「そうじゃなくて・・・学校はどうするつもりなの？」

「転校するわよ。北海道へ。」

「何を勝手なこと言ってるのよ。」

「ごめん・・・でも、行きたいの。」

「新一くん・・・に会いに行くのかしら？」

「え!？」

母の意外な言葉に楓は目を丸くした。

「あなたが新一くんって子を好きなの、知ってたわよ。」

「なんで？」

「寝言でうるさいから。」

「うそ!！」

「本当よ。」

で・・・その子を追いかけるのね？」

「・・・うん。」

「どうしても？」

「・・・だって、しょうがないじゃない!!  
すきすぎておかしくなりそうなんだもん!  
新一くんに好きな人がいるって言われて・・・  
死んじゃうかと思ったくらいなのよ!？」

「楓・・・」

「だからお願い、行かせてよ……お母さん。」

「・・・誰も行くな。とは言っていないでしょう？」

「お母さん！」

「ただし。新一くんには想い人がいるんですよ？  
貴方の想いが報われなくても・・・」

「大丈夫！お母さん。」

私は・・・新一くんへの思いは誰にも負けないから！」

「そう・・・わかったわ。」





「ええ！？楓ちゃん、転校するん！？

新一くん、園子ちゃん、志保ちゃんに続いて  
転校してきた子、皆居なくなってしまうて・・・」

「ごめんね。」

「別にええんやけどね。」

楓は困ったように笑う。

「和葉ちゃん？」

窓の外を見る和葉が目に残まる。

「かーずはちゃん？」

「ああ・・・楓ちゃん。」

「今日、転校するんやて？」

「うん。和葉ちゃん、どうかした？」

「ううん・・・なんでもない・・・」

「ただ・・・工藤君の想い人に会ってみたい、そう思ってただけなんよ。」

「蘭ちゃん、っていうんやて。」

「へえ。」

「楓ちゃん・・・あたし、楓ちゃんの恋は応援できそうにないんよ。」

「え？」

「あたし、平次から工藤君のこと沢山聞いて・・・」

「蘭ちゃんがどいう子か工藤君、たくさん平次に話とるんやて。それを聞けば聞くほど、いい子にしか言いようがないんよ。」

「工藤君の恋も・・・応援したい。」

「・・・」

「園子ちゃんと志保ちゃんから蘭ちゃんのこと、聞いて・・・  
ほんまええ子なんよ。」

あつたことないけど・・・なんか親近感わいてなあ・・・  
蘭ちゃんも工藤君を好きなんやて。」

「・・・」

「あたし、2人の恋を応援したい・・・  
楓ちゃん、ごめん・・・」

「別に、謝ることないよ。」

それは、和葉ちゃんが決めることだもん。  
でも・・・正直、すっごくショック。」

「・・・楓ちゃん・・・」

「和葉ちゃんだけは、私の応援してくれるって・・・  
ずっと、信じてたから・・・」

「ごめ・・・」

「謝らないで!!」

ごめん、和葉ちゃん・・・私、とっても嫌な子だからさ・・・  
あんまり和葉ちゃんの話、聞きたくない。

聞いたら、和葉ちゃんを嫌いになっちゃいそうだから。」

そう言って楓は教室を飛び出した。

「楓ちゃん!!」

L o v e . . . 3 5 　　↓ 追いかけて　　(後書き)

さて．．．楓の恋は!?

Love・・・36 貴方が・・・

「えー、なんと・・・また、転校生だ。」

「ええ!?!」

「またあ? 昨日も転校生だったじゃん。」

「何でも、このクラスを希望してな・・・」

「希望?」

「なんでまた・・・」

「まあ、そういうな。」

「せんせー、女子ですかあ? 男子ですかあ?」

「女だ。」

「ええ、また女ー!?!」

女子一同は口を尖らせる。

「ま、いいじゃない。工藤君がいるんだし？」

「だねえ。」

などと漏らしながら・・・。

「じゃ、入ってもらうか。」

「ふあい。」

昨日の今日で転校生への興味が薄れる

一同は気拔けた声で返事した。



ガラッ

「白石楓です！

工藤新一ちゃんと鈴木園子ちゃん、宮野志保ちゃんと  
同じ学校からきました。  
宜しくお願いします！！」

「わ……可愛い……。」

蘭は呟く。

「……新一くんを追ってきたのね。」

「ええ、私もそう思うわよ。」

「俺が何だって？」

「別に。」

「そうそう、鈍感推理オタクには関係ないことよん。」

「？」

く休み時間く

「楓って呼んでいい？」

ミイはね、ミイって呼んで。浅尾美衣垂って言うの。」

「杏奈ってよんで。三郷杏奈。」

「よろしくね。」

「さつきさ、工藤君たちと同じ学校って言ってたけど、  
工藤君と付き合ってるの？」

ほら、ほな・・・じゃなくて、蘭とは付き合っていないみたいだし  
さ。」

「え？新一くんとか付き合っていないよー。」

「へー、そうなんだあ。」

「いやさ、杏奈がカッコいいってうるさいから。」

「杏奈だけじゃないから、ミイだってはしゃいでたじゃん。」

「はしゃいでないよー。」

2人のやり取りに楓は小さく笑った。

その時・・・

「ストップ！」

「園子!!！」

「園子ちゃん。」

園子が間に割り込んできた。

「楓ちゃんは新一くんとは付き合っていないわよ。  
ただのお友達、だよな？」

「う、うん・・・」

「それに、新一くんの嫁は蘭なんだから、  
手出しは無用なんだからね。  
そこところ、配慮してもらおうよ？」

「ち、ちよつと、園子！！」

私と新一はそんなんじゃないんだから！」

「あらあら、奥さん。

顔が赤いですわよ？照れてるの？」

「照れてるんじゃないくて、恥ずかしいの！！」

「へー、あの子が蘭ちゃん・・・。」

「毎朝、家までむかえに行つて・・・。」

新一くんの両親は今、東京。

そのため、今は不在・・・その新一くんの炊事をやってるのは蘭、あなたじゃない。

そんなことしてて、夫婦だつて言われなんておかしいわよ。」

「え、炊事やってるの!？」

「昨日だつて、夕飯・・・カレーだつたんだつてね？」

「どうして、それ・・・」

「志保が教えてくれたの。」

「・・・志保お。」

「ごめん。本を借りたとき、におつてきたものだから。つい、園子に教えてしまったのよ。」

「いかにも家庭的よね？」

そんな嫁をほつたらかしにする段なの氣心が知れないわ。」

「旦那じゃねえよ。」

「じゃあ、なんなのよ。」

「「幼馴染!」!」」

「はいはい。」

「2人の幼馴染。は今に始まったことじゃないわ。気を落とすことはないわよ。」

「気なんて落としてないわよ。呆れてるだけ。」

「呆れるだけ無駄だと思うけど・・・。」

「志保ってば、たまに毒舌・・・。」

「そうかしら?。」

真っ赤になって反論する新一と蘭の姿を

楓はじっと見つめていた。

L o v e . . . 3 6 〱貴方が . . . 〱 (後書き)

さてさて . . . 楓ちゃんの恋の行方は!?

いかに . . . ?



L o v e . . . 37 ｝ 負けない｝ (前書き)

楓ちゃん視点です！

Love・・・37 負けない

「白石・・・楓ちゃん。

私、毛利蘭。よろしくね？」

「よろしく。」

大きな瞳。長いまつげ。

シルクのような肌。ほんのり桃色の頬。

ぷるんと細い唇。

手足も細く長い。

女の子の良い所ばかり持っている

彼女は・・・

私の好きな新一くんの想い人。

「新一と園子、志保と同じ学校から来たんだよね？」

「うん。」

新一。と当たり前に言える彼女・・・

「あいつ、その学校で変なことしてなかった？」

「変なこと？」

「頭の上に筆箱乗せたり、消しゴムを投げたり・・・」

「え？」

「おい、蘭。

俺はもつ小学生じゃねえんだけど？」

「あ・・・そうだった。」

「でもさ・・・アレは変わってないでしょ？」

「「アレ？」」

私と新一くんは同時に声を漏らしてしまった。

「推理オタクなのは変わってないでしょ？」

「推理オタクってなあ・・・」

「ホームズオタクの推理オタク・・・大バカ推理の介だもんね  
新一は。」

「悪いかよ。」

「別に悪いなんて言ってないじゃない。  
ただ、毎度毎度ホームズの話が聞かされる私の身にも  
なってほしいって言いたいのに！」

「んだとっ」

「ストップストップ。」

「お二人さん。夫婦喧嘩が絶えませんか？」

ストップと言った玲奈ちゃんと・・・

園子ちゃんの口調に似てきたみなみちゃん。

「ふ、夫婦じゃねえ！」

「ふ、夫婦じゃないわよ！」

息がぴったり。

大阪だったら、私が新一くんの隣にいられた。

新一くと息がぴったりだと言われたのは私だった。

夫婦とからかわれたのは私だった。

私の立ち位置が、彼女の立ち位置に変わった。

「新一なんかと夫婦なんて嫌よ！」

「それは俺の台詞だつての！」

「なによ！」

「んだよ！」

「まあまあ。2人とも……」

私が2人をなだめたとき……

斜め後ろから静かな声が聞こえてきた。

「うるさいわよ、2人とも。  
本を読んでいるのが見えないのかしら？」

「宮野……」

「ごめん、志保……。」

「痴話喧嘩もいいけど・・・ほどほどにしといてよね。」

まあ、運良く今は園子が先生に呼ばれてるから今は居ないけど・・・

居たら完全に学年中に広まってるわよ。

2人は夫婦同然だ・・・さっきも喧嘩してた。ってね。」

「うん・・・」

志保ちゃんの静かな声で喧嘩は収まる。

「あ・・・新一。今日の晩御飯何がいい？」

今日さ、お父さん居ないからいつも作れないもの作れるよ!」

「マジ？」

ん・・・オムライスとか？」

「珍しいね。」

「なんとなく食いたくなった。」

「ああ・・・楓ちゃんが見ている雑誌ね。」

彼女がつぶやく。

私も自分の手元に目を移した。

” 今、人気の料理は卵を使った料理！！  
と・・・いえば・・・  
・オムライス！！！！”

と書かれている。

「ま、いつか。

あつても、卵ないから買いにいかなきゃね。

あと・・・昨日作ったビーフシチューをかけて・・・」

彼女はぶつぶつとつぶやいている。



家庭的なんだな・・・。

しかも、新一くんの家へと行くくらいの仲。

やっぱり、付き合ってるのかな。

でも、付き合っていないと言ってたし・・・。

「それより、おば様に会いに行かなきゃ。」

「え？」

「新一のお母さんに・・・私、ずっと会いたかったからさ。」

「・・・そっか。」

「ほんと、蘭と工藤君のお母さん。仲いいのね。」

「ああ。俺よりもな。」

「息子が息子だからね？」

「蘭、おめえな・・・」

「うそ。冗談よ、冗談。」

仲良く話す3人の輪・・・

私は嫉妬せずにはいらなかった。

L o v e . . . 37 ｝ 負けない｝ (後書き)

楓ちゃんの本心!!

「新一くん！ここ教えて！」

「ああ。いいけど・・・白石ならこれくら解けるんじゃない？」

「・・・つむ、無理だから聞いてるんじゃない！」

「そ、そうだな・・・」

何もそんなに怒らなくても・・・と新一はつぶやく。

あの日から、楓の性格は一変していた。

「ねえ、志保・・・あの子、なんか変わったと思わない？」

「ええ。私もそう思うわ。」

工藤君をまるで・・・誰にも渡さない。とても言いたそうよ。」

「だよねえ。」

近くにいる新一、蘭、楓に聞こえぬよう

2人は小さくしゃべった。

「どうしちゃったのかしら。」

「あんなに明るい子だったのにね。」

「本当よ。」

「ここも！」

「こんな簡単なの、白石がわかんねえなんてな。」

「私だってわからない時くらいあるもん。」

それより・・・今日、新一君の家行つていい？」

「「え？」」

新一と蘭の声が重なった。

「あれ、毛利さんには関係ないでしょ？  
なんで声出したの？」

「あ・・・別に・・・  
ただ、私も行くから何となくね。」

「へえ・・・なんとなくか。  
なあんだ、よかった 毛利さん、新一君が好きなのかと思った。」

「そ、そんなことないわよ！！！」

シーン・・・

教室が静まった。

「毛利、静かに。」

「はい・・・」

「一応、言っておくが・・・」

今は授業中。

プリントが配られて、わからないところは友達に聞け。

と先生に指示をされていたところだった。

「くすっ毛利さん、おかしい。」

あ、ねえ・・・それより、行っでいい？」

「いや・・・それは・・・」

「あら、いいんじゃない？」

「え、志保？」

志保のいきなりの発言に園子はおろか、

新一と蘭・・・そして楓までもが目を丸くさせた。

「だって、私と園子も行くもの。」

大勢いたほうが楽しいってモンでしょ？」

「そーだな。蘭、どうする？」

「え？別に、私はいいけど・・・」

「んじゃ、放課後、俺ん家だな。」

「・・・なんで、毛利さんに聞くの？新一くん。」

「え？」

「なんか今の・・・夫婦みたい。」

「「え!？」」

「みたい、じゃなくて夫婦なのよ。」

「「夫婦じゃない!!」」

再び、教室が静まる。



「工藤、毛利・・・静かに。」

「はい・・・」

「ごめんなさい・・・」

「・・・ったく。何やってるのよ。」

「ほんと、まだまだ子供なんだから」

「園子に言われたくねえよ　ないわよ　！！」

「工藤、毛利・・・廊下でるか？」

「すみません・・・」

「ごめんなさい・・・」

「あたしに言われたくないってどついついことよー」

「そのまんまの意味。」

「同じく。」

「この園子様に・・・」

「鈴木、うるさい。」

「あ、はい・・・すみません・・・」

「くすっ」

「おめーだつて言われてるじゃねえか。」

「うるさいわね・・・」

静かに・・・かつ、騒がしく時間が進んだ。



L o v e . . . 38 　　く嫌な子く（後書き）

本日二度目です

Love・・・39　くもつと嫌な子だったらく

「ちょっと、最近・・・調子に乗ってるんじゃない？」

「はあ？」

「工藤君にべつたりでさ。」

「・・・なに、貴方達新一くんが好きなわけ？」

楓は裏庭に呼び出されていた。

女子3人グループに。

「こんな風にねちねちしたことしたら  
モテないわよ？」

「・・・っさいわね！」

「ふっ貴方だって相手にされてないじゃない。」

「え？」

「毛利蘭・・・って子が工藤君の想い人なんですってね？  
結局あなたも・・・私たちと変わらないじゃない。」

「なにそれ。」

「私、貴方を見てて思うけど・・・  
毛利さんが嫌いなんでしょ？」

「・・・」

「工藤君にやたらとべったりして、  
毛利さんに見せ付けてるじゃない。  
結局、貴方だって私たちと変わらないのよ。」

凶星だった。

蘭に心の中で「貴方には新一くんは似合わない。」

と見下していたからだ。

「まあ、そんな貴方の頭を冷やしてあげるわよ。」

「え？」

「これ、バケツの中に水が入ってるの。  
被ったら少しは頭が冷えるでしょう？」

「ぶっちよつと。」

「こんな寒いときに何考えてるのよ。」

「そうよ。」

「風邪引くわよ？冷たい風が吹いてさ。」

「だったら余計に頭が冷えるんじゃない？」

「それもそうね。」

「「アハハハハッ」「」

「んじゃ、いつきまーす。」

「ち、ちよつと本気！？」

楓は後ずさった。

「あつたりまえでしょ？」

バケツを持ち上げたときだった。

まるでスローモーション。

水は瞬く間にバケツの中から姿を現した。

バシャッ

「くっいいい気味！」

「ほんと。」

「頭ひや・・・」





「え？」

楓はどこも濡れていない。

「も・・・うりさん。」

「奈菜、沙希、夏帆。」

「やっていい事と悪いことがあるんじゃないの？」

「ほなみ・・・」

「奈菜、ほなみじゃないよ。今は蘭。」

「あ、そうだった・・・」

「大体、3対1って卑怯だと思うけど。」

蘭が楓を庇っていた。

でも、蘭はどこも濡れてはいない。

蘭の手にはビニール傘。

きつとこれで、身を守ったのだろう。

「大体、言いたいことがあるなら

こんな裏庭に連れてこないで教室で言ったらどう？」

「うるさいな・・・あんたには関係ないじゃん。」

「そうだね。関係ないよ。」

でも、こんな場面を目撃して見て見ぬ振りできるほど私は出来た人間じゃないの。」

「・・・毛利さん・・・・・・・・」

「・・・っ、白石さん。今日は運がよかったね。」

「じゃっ」

口惜しそうに3人は居なくなった。

「大丈夫？楓ちゃん。」

「ありがと・・・毛利さん。」

「あの3人、きっと新一と仲の良い楓ちゃんを羨んでたんだよ。あんまり気にすることないよ？」

「私より、貴方のほうが新一ちゃんと仲良いじゃない。」

「んー・・・でも、今は楓ちゃんのほうが仲良いと思う。ちよっとねー、悔しいかな。」

「え？」

「あ、こんなこと、あいつには言わないでね？」

「う、うん・・・」

蘭はふと空を見上げた。

「私ね、新一が好きなんだ。」

「うん。」

「え、驚かないの？」

「え？でも、知ってたし・・・」

「え、ええ！？いつから？」

「そんなの、見てればわかるわよ。  
最初から知ってた。」

「うつそお。」

「ほんと。」

本当にバレてないとも思ってたのか・・・

楓は小さく笑った。

「私・・・それで新一が好きだね。

会いにきてくれたことは凄く嬉しかったんだけど・・・  
楓ちゃんが来てから、私嫉妬することばかりで。」

「え？」

「楓ちゃんは、最近の新一をよく知ってるんだもん。  
私が知ってるのは小さな新一だけ。  
うらやましくて・・・楓ちゃんに嫉妬ばかり。」

（そんなこと言ったら、私だって・・・貴方に・・・）

「ねえ、毛利さん・・・」

貴方は、誰かがおぼれてたら絶対助けに行く人ね・・・」

「え？何をいきなり・・・」

「その人を守る人・・・だね。」

「・・・当たり前じゃない。」

「え？」

「人を見殺しなんて出来ないもん！

それが・・・どんなに自分の嫌いな人でもね。」

「毛利さん・・・」

「それに、新一もそうだと思うよ？」

「・・・そうだね。」

楓は小さくため息をついた。



「適わないなー。」

「え？」

「毛利さんがもおおおつと悪い人だったら・・・  
嫌な人だったら、こんなにも傷つかずにすんだのかな。」

「え？え？」

「絶対負けない自信があっただけだなー。  
さんねーん。」

「???」

「毛利さん。」

貴方はなにがあっても新一くんを諦めたらダメよ？  
ぜえったいに！」

「うん・・・」

「信じるものは報われる！んだから。」

「？うん・・・」

「あー、なんかすつきりしちゃったあ。  
ねえ、今度美味しいもの食べにいかない？」

「うん。」

「アイスとかいろいろ！」

（楓ちゃん、どうしたんだろう。）

と蘭は1人で？マークを浮かべながらも  
ずっと笑ってる楓に蘭もつられて笑った。





「あ、お母さん?」

『あら、楓じゃない。どうしたの?  
そっちはどう?うまくやってるの?』

「うん。楽しいことばーっかり。」

『そう。よかったわね。』

「でね、お母さん。」

『うん?』

「私、失恋しちゃったあ。」

『新一くん？』

「うん。新一くんの好きな女の子・・・  
すごい良い子でさ。」

「もー、適わないと思ったらなんの！」

『そんなにいい子なの？』

「うん！もう、私・・・ズッキュンってきたね。  
私が男だったらベタ惚れだったと思う。」

『そう・・・で、新一くんを諦めたの？』

「諦めたわよー。」

「あんな彼女いても好きでいられるほど  
神経図太くないもん、私。」

『そうね・・・』

「じゃ、そっちでも頑張るのよ。」

「うん。じゃーね、お母さん！」

楓は静かに受話器を置いた。



L o v e . . . 3 9 　くもつと嫌な子だったら　く（後書き）

さあ、そろそろ完結へ！！



「転校することになったんだ。」

「え!？」

「東京に戻ることにしたの。」

お母さんと・・・暮らしたいからさ、やっぱり。」

「・・・そっか。」

「ん・・・」

みなみと玲奈、美黎に真帆は目を伏せた。

「皆と過ごした毎日、楽しかったよ！  
ありがとう。」

「・・・ねえ、蘭が居なくなるってことはさ・・・  
工藤君や園子ちゃん、志保ちゃんも居なくなるの?」

「昨日、聞いたらやっぱり転校するって皆・・・」

「4人も転校しちゃうのか。」

「うん・・・」

寂しさを隠せない。

「本当だったら、ここに居たいけど・・・」

「わかってる。」

やっぱり家族は集まって暮らしたほうがいいよ。  
お母さん、寂しいだろうしさ。」

「うん。」

「いつ、転校するの?」

「いきなりで悪いけど・・・今日。」

「そっか・・・」

「  
ら  
ん  
！」

「ごめん！」

「なにやってんのよ。  
飛行機に乗り遅れちゃうよ?」

「ごめんって！」

蘭は小さく笑う。

「・・・ん！」

「・・・え？」

「どうかした？蘭。」

「今、何か声しなかった？」

「え、別に・・・」

「そっか・・・」

「・・・ん！」

「ほら、やっぱり!!」

「声なんて聞こえるに決まってるでしょ?  
ここ、空港だもの。」

「だよね・・・」

「らーーーーん!!」

「蘭を呼んでる・・・」

「私もばつちり聞こえた・・・」

後ろを振り向くと、みなみ、玲奈、美梨、真帆・・・

同じみのメンバーが走ってきていた。

「蘭！また、北海道に遊びに来てよね。」

「絶対、だぞ？」

「ま、その時は何か美味しいものでも食べようよ。」

「たっくさん遊ぼうね!!」

「みんな・・・うん、絶対行く!」

「園子ちゃん、志保ちゃんも元気だね！  
あ、それと・・・工藤君。」

みなみはこっそり新一に耳打ちする。

「あーんまりのんびりしてると・・・」

蘭、他の男の子に取られちゃうんだからね？」

「バツ俺は、アイツのことなんか・・・」

「ほら、そうやって意地はるー！」

「張ってねえよ！」

「ってことで、頑張ってよね、工藤君！！」

「みなみ、何はなしたの？」

「秘密」

「えー？」

「あ、蘭。これ・・・みなみたちから。」

「え？」

みなみの手から光るブローチ。

「世界にたった一つなんだから。

それを持っていれば、どれだけ蘭の外見が変わってもわかるからね！」

「うん！・・・でも、外見が変わることはもうないよ。」

「あはっやっぱり？」

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*



「じゃ、そろそろ時間だから。」

「わかった。」

「じゃあねー！」

「ばいばい！」

笑顔で別れた。

L o v e . . . 4 0    〈 転校 〉 ( 後書き )

さて、次回で完結!!

Love . . . End ｝コスモス｝

あれから4年。

新一と蘭は高校3年生になっていた。

晴れて恋人同士となった2人。

「えー、今日は転校生を紹介する。」

「えー、誰だろ。」

「入ってくれ。」

ガラッ



「白石楓です！」

北海道、神山南高校から来ました。

新一くん、毛利さん、園子ちゃん、志保ちゃんと同じ学校だった  
ことがあります。みなさん、よろしく！」

「し、白石！」

「楓ちゃん！？」

「やつほー、久しぶり！！」

見てみて。ショートカットにしてみたの。」

「誰も聞いてねえよ！」

「なによー。せっかくイメチェンしてみたのにさあ。」

楓が口を尖らすと先生が静かな声で言い放った。

「はいはい。」

話は後で。白石は鈴木の前に座ってくれ。」

「はあい」

不思議がる新一、蘭、園子、志保に向かって

楓は得意顔を見せた。

\*\*\*\*\*

「で？何で転校してきたの？」

「うんとね・・・蘭ちゃんに惚れたから!!」

「・・・は？」

「私・・・？」

「うん・・・あのときから私は蘭ちゃんに心を奪われて・・・  
あ、蘭ちゃんって呼んでいいよね？」

「うん・・・」

「あ、そうそう。

2人とも付き合ってるんだって？  
新一くん、私ぜえったい負けないわよ！  
蘭ちゃんを射止めて見せるんだから!!」

「・・・彼女ってこういうキャラだったかしら？」

「な、なんか違う・・・」

「ま、改めてよろしくね！4人とも」

楓の満面な笑みに何も言えなくなった。





「蘭、コスモス畑見にいかねえか？」

「え？何言ってるのよ。」

もう11月よ？花なんて萎れてる時期じゃない？」

「ま、いいから来いって。」

「？」

得意げな新一の笑みに蘭は？マークを浮かべる。

\*\*\*\*\*

「わぁ・・・綺麗・・・」

「だろ？」

「なるほどね、温室・・・」

「ああ。」

「で？誰の温室？」

「俺ん家の温室に決まってるんだろ？」

「一応色んなコスモス買い占めて植えた。」

「道楽息子・・・」

「あんなぁ、この温室、ほったらかしにしてるんだぜ？  
何か植えとかねえとヤバイだろ。」

「ふうん・・・」

「なぁ・・・蘭、覚えてるか？」

「・・・大人になってもずっと一緒にいよう。・・・ってやつ？」

「そう。」

蘭はコスモスを一つ、手にとって答えた。

「俺・・・あの時から変わってねえよ・・・」

「え？」

「蘭とずっと一緒に居たい・・・ってさ。」

「そ、それって・・・」

「結婚しよう、蘭。」



「うん！！」

2人をお祝いするかのうちに

沢山のコスモスが揺れた。

風もないのに。





Love・・・End 〵コスモス〵（後書き）

さあ、やっと完結いたしました！

・・・やっとなって言ったら聞こえが悪いか・・・。

初めての平行、かなり緊張しましたが・・・。

完結までもっていけて・・・よかったです！

さてさて・・・

完結したので・・・リクエスト小説を書きたいと思います！！

宜しくお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9801w/>

---

秋桜

2011年10月30日20時14分発行